裏切りの街角

吹雪の中の彷徨

寒風が容赦無く俺の身体に吹きつけていた。

寒い・・思わず意識が遠のきそうになるほどの体が凍える吹雪の中を俺は防寒着の襟を握り絞め帽子を押さえながら歩き続けていた。

油断すると強風に煽られコートごと俺の身体から奪い取られそうであった。

それより堪え難かったのは、雪の粒がまるで飛礫つぶての様に俺の顔に叩き付け、雪の塊がぶつかる度に激しい痛みを与え続けた。

まともに吹き付ける雪の塊で目を開ける事も出来なかったが、例え目を見開いても白一色の世界では1メートルとして視界は無かった。

此所は誰も人の居ない冬山の中であった。

その吹雪ブリザードの吹きすさぶ深夜の雪原を俺は一人あても無く流離きすらっているのだ。

晴れた昼間なら木々が見え山の稜線も見渡せた事だろうが、今視界の全ては白く閉ざされ、自分が何処に居るのか、どちらに進んで居るのかさえも判らなかった。

生命の無い一面の白い世界の中で、自然は唯一、命いのちながら存えている俺に対して怒りを覚え、俺を罰するように容赦無く責め続けているように感じられた。

他の労務者達が止めるのを振り切って一人、山中の工事現場の飯場を飛び出して来たのであった。

何処の世界でも人の生き血を啜るように人間に寄生して生きて行くダニの様な男は居るもんだ。

その飯場でも組頭となっている男は前科何犯かを自慢し、暴力と恐怖で他の工夫達を搾り上げていたのだった。

その男は、とある暴力団に繋がるこの工事を請け負った土木会社から送り込まれた暴力団員で、過酷な現場に送り込まれた腹いせをする様に、作業員を怒鳴り散らし、暴力を振るい、恐怖で支配し、人々から金を巻き上げるのであった。

その飯場は俗に‘たこ部屋’と呼ばれる、善良な土木会社とは無関係の暴力団が支配し過酷な環境で労働者を酷使する地獄の様な環境であった。

勿論他の作業員もスコップやツルハシを武器とすればこんな男の一人や二人は簡単に倒せる事は分かっていたが、その背後に控える暴力団の報復が恐ろしくて大人しく従っていたのであった。

ある日俺は、とうとう我慢が出来なくなってその男を半殺しにしてしまったのであった。死んだように身動きもせず血塗れになって俺の足下に横たわるそのダニ男を見て早まった事をしてしまったと後悔した。

周囲には作業員が不安そうな表情を浮かべて取り囲んで居た。

此所に居ては他の土工の迷惑になると覚った俺は周囲が止めるのも構わず雪嵐^{フリザード}の吹きすさぶ表に飛び出したのであった。

それからどれぐらいの時間どちらの方向に彷徨い歩いたのか判らない。

辺りは一面のホワイトアウトの世界で在った。

強い風に煽られ身体が持ち上げられても、既に上下の区別も出来なくなっていた。

寒いとか痛いとか言う感覚は何時の間にか喪失し、疲労と眠気は既に極限を超えていた。

最早歩む力も失われ、雪の上に倒れ伏した事が判ったのが俺の最後の記憶で在った。

「俺は此所で死ぬんだ・・・」と、薄れ行く意識の中で呟いた。

雪原に横たわる俺の身体の上を雪がたちまち覆っていった。

嵐が去って晴れ渡り、空は抜ける様な青空に覆われていた。

強い陽光を受けて降り積もった雪が眩しく反射していた。

見渡す限りの雪原の中で一部雪が歪に盛り上がっているのを、山の民である村木は見逃さなかった。

僅かな雪の起伏では在るが長年の経験で彼はその下に動物がーいや人間が埋まっている事を知っていたのだった。

急いで駆け付けると、両手で雪を掻き分けた。

そして、その中に若い男が埋まっているのを発見した。

「しっかりしろ！」村木はその若者を抱き抱えて声を掛けた。

まだ生きて居るぞ！顔色は蒼白で意識も無かったが微かに息をしている事に気付いた。

そして、村木は意識の無い俺を雪の中から掘り起こし、担ぎ上げて彼の小屋に連れて行ったという事だった。

「もっと槓をくべて部屋を暖かくしろ！」

村木には妻と若い娘がいたが、二人にテキパキと命令した。

「体温が低い！このままでは死んでしまうぞ！」

村木は二人に裸になって添い寝する事によって暖めるように命じた。

この極限の地において家父の命令は絶対である。二人の女は嫌がる素振りも見せず、大人しく着ている物を脱ぐと、同じく全裸にした俺の上に身を寄せてきた。

三人で布団の中にくるまれ、氷の様に冷たくなった俺の身体を抱き締め、その温もりを伝えた。

勿論俺は意識を完全に失っていたが、何か暖かいモノが伝わって来たような感触は今も心の隅に残っている。

俺が完全に意識を取り戻したのはそれから三日ほど経ってからであった。

差し出された熱い芋がゆが喉を通る時その美味さと暖かさが心に滲みた。

意識の無い間、母娘は必死に俺を抱いて暖めてくれていたらしい。

俺は命を助けられた礼を村木家族に言い、頭を下げた。

家長の村木がそんな事は気にせんで良いと、鷹揚に応えた。

意識が無かったとは言え、全裸で俺を抱き締めて俺に温もりをくれた、十六、七歳の娘一紀久子が、恥ずかしそうに頬を染めて俺の方に目を遣った。

村木は‘マタギ’の末裔で在るとの事であった。

マタギとは山奥で狩猟や採集によって生活し、独特の宗教観や生活習慣を持ち、里に暮らす人間とは違った生活を日本古代から送っている山の民である。

もともと日本も明治以来の文明化に伴い純粋にマタギとして生きる人間は減って行って山の民の生活習慣も段々と廃れていったが、村木は頑固に古来の習慣を守り、自分こそ日本最後のマタギだと笑っていた。

そんな村木も山奥の工事の事は知っており、その飯場で暮らす作業者の大半は訳ありの男達で、街では暮らす事の出来ない事情を抱えた男達で在る事は理解していたので、飯場から脱走して来たと打ち明けた俺に対しても深く質問する事は無く、そっとして置いてくれた。

「池山さん・・・」

俺はその頃池山という偽名を使っていた。

「アンタは悪い人間じゃない。儂は目を見ればその人が悪人かどうか判るんじゃ。アンタは良い目をしている。悪人の目じゃない・・・もっとも熊の目と良く似ておるがの・・・」
と、言って笑った。

口数の少ない無骨な男ではあるがそんな優しさが心に滲みた。

村木の妻はシゲと云う名前であったが、大人しい女で俺に質問する事を亭主から禁じられているのか、同じ小屋の中に居ても言葉を交わす事は少なかった。

一方、若い紀久子は都会育ちの俺に興味津々の様で色々の事を質問して来た。

そして、俺の話す都会生活の事を目を輝かせて聞くのであった。

体力の回復と共に俺は村木の狩猟を手伝うようになっていた。

特に請われた訳ではないが、人一倍体力に自信のある俺は、何時の間にか自然と村木に付き従うようになり、村木と共に山の中を歩き回る様になっていた。

そんな俺を村木は極限の中で生活するコツを身を以て教えてくれた。

村木は俺の親父ほどの歳であったが、実際自分の息子の様に接してくれた。

今はマタギ仲間も銃を使用して狩猟するようになっていたが、村木は昔ながらの手槍や手斧だけで獣と向かい合っていた。

詳しく言葉で語られた事は無いが、銃を使用して獲物を仕留める事は自然への畏敬の念に反するとの彼独自の哲学が在るよう感じられた。

俺も村木に習って手斧と手槍で獣を仕留められる様に努力した。

村木に教えられ獣の素早い動きに負けない俊敏さを身に着け、最初は村木の助けを借りて獣を仕留めていたが、何時しか俺一人で熊を相手に仕留めるまでになっていた。

そんな俺の成長ぶりを村木も目を細めて嬉しそうに眺めていた。

これなら一人でも山の中で生きて行けると思っているようであった。

村木家族と寝起きを共にするようになって、俺と紀久子との中も次第に親密になっていった。

紀久子の俺を見る目付きも、都会育ちの男を始めて見た好奇心の目付きから、より情熱を帯びた潤んだモノになったいた。

俺も紀久子の傍に居るだけで何か甘酸っぱいものを感じるようになっていた。

女っ気のない工業高校の更に男臭い柔道部に属していた俺はこれまで女の子の友達も持った事も無かった。

それは、俺にとって初恋と呼んで良いもので在った。

そして、ある日俺は紀久子を抱き締めた。紀久子も俺の腕の中で小さく震えながら俺の愛を受け止めてくれた。

イヤイヤをする様な紀久子の頬に頬を寄せて、その唇を貪った。俺の情熱に応える様に紀久子も唇を強く押し付けてきた。

紀久子の閉じた瞼から一滴の涙がこぼれ落ちた。

俺は夢中に成って紀久子の衣服を脱がせた。

ぎこちない俺の手付きにも逆らう事は無かった。

俺が意識の無い間に身体を接した事は在るとは言え、始めて目にする紀久子の身体は幼く感じられた。

未だ十分に膨らみきっていない幼い乳房が、興奮した胸の動きで揺れていた。その先端でフルフルと震える桜色の乳首が愛らしかった。

股の間に幼い春草が繁茂していた。

俺は熱に浮かされた様に紀久子的大腿を抱えると左右に押し広げた。

男の目に陰部を晒す羞恥に、イヤッと小さく悲鳴を上げて顔を背けた。

俺は憑かれた様に夢中になって紀久子の股間に顔を押し当てた。

紀久子の口からヒィと声が上がり身体を仰け反らせた。

そんな紀久子の反応を無視して鼻先を押し当てる俺の鼻腔に処女の匂いが流れ込んだ。

紀久子の其処は既に熱く熱く湿っていた。

堪らず舌を伸ばして、その秘められた割れ目にソロリと舌を這わせた。

始めて陰部を嘗められた経験に紀久子のウブな身体がビクッと震えた。

まだ未経験の女しか持たない独特の味覚が臭覚を伴って口の中に拡がった。

俺は女と接するのは初めてでは無かった。高校の柔道部で有力選手だった俺は、先輩に‘筆おろし’だと言われて、無理矢理旧赤線地帯に連れて行かれた事が在った。

それが俺にとっての初めての経験であったが、無味無乾燥な交接との記憶しかなかった。

ベテランの売春婦から色々なサービスを受けたが、何の感動も覚えなかった。単に肉の孔に自分のモノを突っ込んで射精したとの記憶しか無かった。

勿論トルコ嬢と違い何も身体を動かさずただジッと耐えるだけの紀久子には俺の方から仕掛けていくしかなかった。

熱情に駆られて熱く火照った紀久子のその部分に熱く^{たま}滾った俺のモノを押し当てた。

処女膜を引き裂かれる痛みに目を硬く閉じ眉根を寄せて耐えている紀久子ではあったが、その表情は至福感に溢れていた。

年季を経た売春婦も巨根だと驚いた俺のファルスを痛みを堪え、ハアハアと忙しく息を吐き、額に汗を浮かべながら根元まで受け入れていた。

そんな紀久子の事がいじらしくなってギュッと強く抱き締め唇を重ねた。

紀久子と一つに繋がった俺は得も言われぬ幸福感に満ちあふれていた。

俺の腕の中でジッと抱かれながら身体を密着させ互いの愛を確認しあった。

紀久子と俺が結ばれた事は村木にもシゲにも判っていたはずであったが、村木の俺に対する態度は変わらなかった。

都会では暮らしていけない或事情を抱えた俺は、このまま紀久子の婿となってマタギの跡継ぎになる事が理想の様にも思えた。

しかし、そんな俺と紀久子の愛情に満ちあふれた生活も終わりを告げる刻が迫っていた。

雪がすっかり溶けて森の木々も青々とした葉を付けた頃、その男達はやって来た。

俺が半殺しにした暴力団員の所属する組の組長から依頼を受けた残酷な人間狩りのハンター達がやって来たのだった。

ライフルを肩に掛けた屈強な五人の殺人部隊が人の分け入らない森の中に侵入して来た。

最初事件の遭った飯場を訪れ作業員を脅しつけて事情を聴取して、近くにマタギの家が在る事を耳にした彼らは目星を付けて此所にやって来たのだった。

「しかし、本当に池山の野郎は生きていますか？飯場の連中はあの吹雪の中に一人で飛び出して生きていますはずは無いと言ってますがねえ」

「奴が生きていますかいないか判らねえ。だが手ぶらで帰る訳にも行かねえだろう。例え見つけられなかったとしても何らかの情報を持って帰らないとな・・親分に合わす顔が無いだろう。」この殺人部隊のリーダーの男が言った。

「冬山の吹雪の中で歩けるとしても飯場から10キロが良い所だろう。頑張っても15キロ位だろう。この範囲に人の住む所は無い。しかし飯場の古参を締め上げたところ、その先の山の中にマタギの家族が住む小屋が在るらしい。」

地図に無い山中を彷徨い歩きながら、殺人者達は遂に其処を発見した。

森を抜けて開けた草原に出た所に村木の小屋は在った。

樹間から小屋の様子を窺いながらリーダーが指差した。

指差す先には物干しが在り、其処に如何にも村人風の洗濯物に混じって若い都会風の男が身に着けそうな下着が干されていた。

其処に目指す男が居ると確信したリーダーがニヤッと口の端を歪めた。

目配せを受けた男達は分散して遠巻きに小屋を取り囲んだ。

そして、周囲を警戒しながらジワジワと小屋に迫った。

小屋に取り付いた殺し屋達は、小屋の中の様子を窺った。

その時俺は一人で猟に出ており、小屋には村木とシゲと紀久子の3人しか居なかった。

後悔しても仕切れないのは、村木が何も聞かなかったのが、俺が飯場で暴力団員を半殺しにして逃げ出してきた事を黙っていた事だった。暴力団はメンツを保つため報復の人間を送り込む事は分かっていたが、此所が見つけれられるとは予想していなかった。

もし、本当の事を言っていれば、村木一家も警戒して周囲の森に罾を仕掛けるなどして、むざむざと殺し屋たちの侵入を許さなかったろう。

しかし、俺は本当の事を打ち明ければ、厄介者の俺を追放し、紀久子との甘い生活を失う事になるのでは無いかと恐れていたのがあった。

小屋の中で床に胡座座りして道具の手入れをしていた村木は、小屋の周囲から発する異様な雰囲気気付いていた。そして人差し指を唇に当て女達に声を立てないよう合図を送った。

リーダーが小屋の窓から中を覗き込もうとした時、「其処に誰か居るのか？」と声を発した。

「へへ・・・気付かれていたのなら承が無いぜ・・・」と、小さく呟くと、戸口に立って、

「おい！俺達は池山と云う男を捜しているんだ。知らないか？」戸口から暗い中を覗き込みながら尋ねた。

戸口に立つ大型のライフルを肩に掛けた不気味な男の姿を見て、まともな人間ではないと確信した村木は、「さあ、知らんな。」とぶっきらぼうに応えた。

小屋の中を見回したリーダーは、小屋には男と女二人しか居ない事を見て取った。

そして、この40過ぎに見える山家やまがの男があんな都会風のパンツを穿いている訳は無いと考え、池山を匿っている事を確信した。

「そうかい？まあ、名前は変名を使っているかも知れんがな、まだ二十歳前はたちの背の高いガ

ツチリした体付きの男だ。」

殺し屋は断りも無くズカズカと小屋の中に入って来て尋ねた。

「知らん、この辺では見たことも無い・・・もう帰ってくれ！」

村木が苛立たしげに応えた。

「そんな連れない事を言うなよ・・・俺達はこの2、3日山の中を歩き詰めで疲れているんだ。茶の一杯くらいご馳走してくれないか？」

無遠慮に上がり 榎がまちにドカッと腰を降ろして言った。

仕方無さそうにシゲが立ち上がって湯を汲みに行こうと男の傍を通った時、殺し屋は手を伸ばしてシゲの腕を掴んだ。

慌てて男の手を振り解こうとしたが、ガッチリとシゲの腕を握った男は離さなかった。

「へへ・・・アンタこの山の中で暮らしている割には別嬪さんじゃないか？化粧してキャバレーにでも出れば随分と稼げるぜ・・・」と、イヤらしい目付きで狼狽するシゲを見詰めながら声を掛けた。

「何をする！」村木が大声を上げた。

「アンタは知らないようだが、アンタのカミさんなら知っているかと思ってよ。」

必死に振り解こうとするのを無視するように村木の方を冷たい目で見詰めながら言った。

そして、シゲの方を振り向くと、「アンタ池山って言う若い男を知らないか？」と尋ねた。

男の強力で腕を掴まれながら、「知りません！」と必死で叫び声を上げた。

「そうかい？アンタも知らないかい？それならそちらの若いお嬢ちゃんなら知っているかも知れないぜ・・・」部屋の奥で怯えた表情を浮かべる紀久子を淫靡な光りの籠もった目で見詰めた。

この不気味な男が妻と娘に淫欲を抱いている事を理解した村木は壁に掛けていた手槍に手を伸ばした。

その時、「動くな！」と、小屋の外で中の様子を窺っていた二人の男がライフルを構えて戸口に現れた。

「へへ・・・アンタも物忘れが酷いようだな。少々痛いめを見なければ思い出せない様だぜ・・・」勝ち誇った様にリーダーが呟くと、床に胡座を組んだままの村木にライフルを向けた。

異常な事態に女達が悲鳴を上げた。

小屋に響く悲鳴も気にせずリーダーが引き金を引いた。

弾は床に座る村木の脚を貫いた。

反動と激痛に村木は仰向けに倒れた。

「アンタ、物騒な物を持っているじゃないか？」

村木が右手に手槍を握り絞めている事に気付いたリーダーは、床に仰向けに倒れ伏す村木を見下ろしながら、銃口を向けた。そして躊躇無く右手ごと打ち砕いた。手首から先を失った右腕から夥しい血が溢れ出した。

「どうだ？痛いだろ？思い出したかい？」

登山靴で村木の胸を踏み躪りながら冷酷な視線を送った。

村木は血の気の失せた顔で必死に頭を振った。

「どうやら、此所に池山の野郎が居ない事は確からしい。しかしその内戻って来るだろう。

それまで暇つぶしに女達に相手して貰うのも悪くは無いな・・・」

余りにも大きな衝撃と恐怖に声も上げられず床にしゃがみ込む母娘を淫靡な目で見詰めながら呟いた。

小屋の中に入り込んだ五人の殺し屋達は歓声を上げながら一斉にシゲと紀久子に向かった。

その時、俺は山向こうに居て、仕留めたイノシシを肩に担いで小屋に戻る所であった。

陽の傾き始めた稜線の向こうから間を置いて二発空気を震わせる様な音が鈸するのを耳にした。

アレは鉄砲の音だ！と俺は確信した。しかも仲間のマタギ達が使う猟銃の音とも違う。それにこの辺りは村木の狩り場で、断り無く他のマタギが入ってくる訳が無い！

言い様の無い不安に襲われた俺は仕留めたイノシシを捨てて小屋に急いだ。

「へへ・・・流石は山坂を上り下りして鍛えられた女だぜ！腰の肉付きが違うぜ！その強い筋肉で締め付けるから、どうでえ、この締め付け様はよう！こりゃトルコで働かせたら良い稼ぎになるぜ！」

シゲに自分のモノを突き立て腰を振りながら有頂天になって叫び声を上げた。

「こちらのお嬢ちゃんも若い割にはグイグイ絞めてくるぜ！」

紀久子を責めた立てる男も嬉しそうに声を上げた。

哀れな母娘は既に何人もの男達から入れ替わり立ち替わり犯され続け、既に悲鳴も涙も涸れ果てている風情であった。

既にまともな意識も喪失したように、淫欲に狂い乱暴に腰を振りたてる男達に無抵抗に身

を任せていた。

右手と左足をライフルで吹き飛ばされ、更に左手もナイフで抉られた村木は死んだように横たわっていた。

大量の血を流し、既に死相の現れていた村木の耳がピクリと動いた。

微かな物音であり、誰も気付かない足音であったが、常に野生動物を相手にしている村木は反射的に反応した。

そして、「池山さん！逃げろ！」と、残った力を振り絞り声を発した。

村木の叫び声で俺が直ぐ近くに近づいているのを知った殺し屋達は、慌てて裸身の上にズボンだけ履いてライフルを手にした。

そして、ライフルを手に表に飛び出そうとする男達をリーダーが制した。

「待て！森の中では俺達が不利だ！こちらには人質が居る。奴をこちらにおびき寄せろんだ！」と、窓から外の様子を窺いながら命令した。

「おい！池山！其処に居る事は判かっているんだ！爺じいと女の命を助けて欲しければ、大人しく出て来い！」

俺は木の陰から小屋の様子を窺っていたが紀久子達を人質に取られていてはどうしようも無い。

俺は森を出て小屋の方に歩み始めた。

「おい！こっちに来たぞ！どうする？」

窓からライフル銃を突き出し、狙いを定めながらリーダーに聞いた。

「先ずは生け捕りにしなければどうしようもあんめい・・・」

「そうだ！両手を上に上げて真っ直ぐこっちに来て小屋に入るんだ！」

リーダーが小屋に向かう俺に命令した。

兎に角此所は逆らう事も出来ず、俺は両手を挙げたまま小屋の戸口に向かった。

戸口から小屋の中を一瞥して、俺は愕然とした。

上半身裸でズボンだけを履いたライフルを手にする5人に筋骨逞しい男、全裸に剥かれて倒れ伏す紀久子とシゲ、全身血塗れの村木さん・・・俺は怒りで血が逆流するのを感じていた。

「これは、これは、池山さんよ、半年ほどの間に随分と山家の姿が身に付いたじゃないか？」昔ながらのマタギの姿をした俺を上から下までジロッと見詰めて小馬鹿にしたように声を

掛けた。

「俺達は仕置き人さ・・池山さんよ、俺達は別にアンタに恨みが在る訳じゃないが、アンタが重傷を負わせた組員の親分さんから依頼されたのさ。世の中には偶^{たま}にアンタの様な跳ねっ返りが出るもんさ・・だけど暴力団が素人から馬鹿にされたままじゃシメシが付かない。シノギにも影響が出ようってもんさ・・だから許しておく訳には行かないんだよ。」

リーダーが銃口を俺に向けたまま油断ならない目付きで喋り続けた。

他の男達は完全な勝利を確信して銃を小脇に抱えたまま面白そうにやりとりを見詰めていた。

「安心しな、ここでアンタを殺しはしないよ・・飯場に連れ戻して仲間の工夫達の見ている前でいたぶり殺してやるよ・・せいぜい残酷にな・・そうすれば他の男達も二度と逆らおうという気は起こさないだろうぜ・・」

リーダーが俺の顔色を覗き込みながら薄気味悪い笑みを浮かべた。

「・・そう言えば、2年ほど前から別の暴力団の組からもアンタと同じような年格好の男を捜してくれと以前から依頼されていたっけな・・八方探したが見つけれなかった・・東京の下町の長谷川なんとかっていう町工場の高校生に組員が二人殺られたって・・」

リーダーは俺の表情が一瞬変わるのを見逃さなかった。

そして、突然大笑いし始め、「アンタ命が幾つあっても足りないようだな！」と嬉しそうに叫んだ。

その時、死んだように横たわっていた村木が唯一無事に残っていた右足を動かしリーダーの脚を絡め取った。

それは村木の最後の命を賭した賭であった。

不意を衝かれたリーダーは思わず前のめりに倒れた。

その一瞬の隙を逃さず、俺はリーダーに襲い掛かり、背後に回って羽交い締めにし、腰にした鉞をリーダーの喉首に押し付けた。

他の4人は一瞬の隙を突かれ何も出来ない内にリーダーを取り押さえられて狼狽した。

ライフルをこちらに向けたが、リーダーの身体が盾となって俺を撃つ事出来なかった。

慌てて横に回ろうとする男に俺は鉞を投げた。

鉞を額に受けた男が夥しい血を噴き出し、そのまま床に崩れ落ちた。

仲間の男の死を目前にして男達の身体が膠着した。

その隙に、背後から回した腕に力を込めてリーダーの首をへし折った。

脊髄が不気味な音を立ててリーダーの首がガクッと前のめりに倒れた。

熊と素手で戦っても勝てる自信を持っていた俺の腕力の前には呆気ない最後で在った。

俺はリーダーの死体から銃をもぎ取り連射した。

後にはライフルに打ち抜かれ呻き声を上げる男達が蹲っていた。

「村木さん！」俺は横たわる村木の傍に駆け寄った。

村木は俺の方を見て一瞬微笑んだ様にしたが既に事切れていた。

「イヤだ！村木さん！死なないでくれ！」

俺は村木の遺骸に取りすがって泣き叫んだ。

最早身動き一つしなくなった村木を抱き抱えたまま、怒りを含んだ目で苦しそうに呻き声を上げる殺し屋を睨み付けた。

こんな下らないダニに村木さんが殺され、紀久子とシゲが強姦されたのかと思うと血が逆流するのを感じた。

手に持った鉈でこの怯える顔を切り刻んでしまえーと、俺の中の怒りが命じた。

俺は身動きも出来ず^{うずくま}蹲る殺し屋の前に仁王立ちに立つと鉈を振り上げた。

重傷を負い身動きの出来なくなっていた殺し屋の目に恐怖の色が宿った。激痛に声も上げられ無い唇が、^{かす}微かに「助けてくれ」と動いたように感じた。

「よせ！神聖な道具をそんな事に使うんじゃない。」

突然村木の声が耳元に聞こえたような気がした。

それは、常に自然を畏敬し、狩猟した獣にさえ感謝の心を捧げていた村木の最後の教えだったのかも知れない。

しかし俺は村木の教えを無視した。鉈から手を離したが、床に落ちていたライフルを拾い上げると、銃床（ライフル銃の木製の肩当て部分）で男の顔が原型を留めないまで打ち据えた。

眼球が飛び出し、辺り構わず血や脳漿が飛び散った。

怒りの赴くままに、まだ息のある殺し屋達を打ち据えた後、ハアハア吐息を荒げて紀久子の方を見た。

俺を見詰める紀久子の目には恐怖しか無く、其処には以前の俺に対する愛情は完全に消え失せている事が判った。

俺は紀久子を抱き締めようとしたが、彼女は手足を藻掻かせて頑なに俺を拒んだ。

その時、俺は、俺自身がこのダニ達と同じダニで在った事を思い知らされたのだった。

復讐の街角

「居たぞ！此奴だ！」

七首を手にした暴力団員が5人ばかり、一人の革ジャンパー姿のガッチリとした肉付きの背の高い青年の回りをワラワラと取り囲んだ。

「おやおや・・・こちらから探さなくてもカモがネギを背負って自分からやって来てくれるとは、手間が省けて嬉しいぜ・・・」

手に手に武器を握り締め、殺気を帯びた眼差しで迫るヤクザ者達に周囲を取り囲まれても、青年は少しも怯える素振りは無く、それどころかニヤけた微笑を浮かべるのであった。

一方、七首を手に取り囲むヤクザ達は、凶暴な^{ひぐま}熊を取り囲む猟師の様に、目に異様な緊張感と何処か恐怖に怯えた色を浮かべていた。

「この野郎！ふざけやがって！今日こそ恨みを返して貰うぜ！」

この若者の不敵な態度に怒りが頂点に達したのか、正面に対峙したヤクザ男が大声を發した。

日もとつぷりと暮れ、人通りもない繁華街を外れた裏通り。

電信柱に取り付けられた僅かな街路灯の灯りだけが、彼らの回りを侘びしく照らしていた。その薄明かりの中で、獲物を追い詰めた猟犬の如く、生死を掛けた血腥い暴力への興奮に目を爛々と光らせた暴力団員達が居た。

一方青年の方は何も武器を手にする訳でも無く落ち着き払った表情で暴力団員達と向かい合っていた。

相変わらずニヤけた表情を浮かべていたが、その身体から發する威圧感^{ひぐま}は暴力に慣れた男達を居竦ませるモノがあった。

互いに対峙し合う緊張感に我慢が出来なくなったのか、正面に陣取るこの一団の首領級の男が奇声を發しながら七首を手^{ひぐま}に飛び掛かった。

間一髪の間合いで、七首を避けた若者の拳が、無防備な暴力団員の顔面にめり込んだ。

七首を帯びて飛び込む速度と、若者の鋭い鉄拳がカウンターとなって暴力団員の顔面に食い込み、男は声も上げること無く、まるで積み上げた積み木が崩れる様に、倒れ伏していった。

鼻骨を砕かれ頭蓋骨にめり込んだ男の顔面は一面真っ赤な血に染まっていた。

余りにもあっけない結果に、この若者と自分達の力の差を思い知らされた様に、残った暴力団員がたじろいだ。

「どうした？来ないのか？」

若者がまるでボクシングのファイティングポーズの様に両腕を構えて残った男達を挑発した。

若者の背後に位置した二人の暴力団員が互いに目配せして、同時に背後から襲い掛かった。まるで後ろに目が付いているかの様に気配で襲撃を察知した若者は、きわどく二人の攻撃を避け、一人には腹部に激しい蹴りを浴びせ、もう一人にはすれ違いざまに、首すじに肘を当てた。

続けざまに三人の屈強なヤクザ者が瞬殺されるのを目の辺りにして、残された二人の若い新米ヤクザは最早戦意を失っていた。

手にした匕首を投げ捨て、悲鳴を発して逃げだそうとした。

「待て、待て！何処へ行く！まだ終わっちゃいないぜ！」

巨体に似合わない快速で二人を追いかけた若者は、逃げるヤクザの首すじを掴んで、背中から地面に投げ倒した。

無力な獲物をなぶり殺しにする快感に酔っているかの様に、若者の目に残忍な狂気の光が宿っているのを見て、地面に仰向けに横たわる完全に戦意を喪失した男達が声にならない悲鳴を上げた。

若者の全身から発する凶暴な気配を受けて、怯えてガタガタと身体を震わせ、恐怖の余り失禁してズボンの股間からシミが見る見る広がって行った。

若者はそんなか弱い男達に憐憫の情を抱く事などまるで無いのか、まるでゴキブリを踏み潰すように、その大き足でヤクザ者の顔を踏み潰し、残忍な地獄の悪鬼の如く無力な男達に暴力を加え続けた。

暫くした後には、顔中血だらけにし、手脚の骨もへし折られた5人のヤクザ者の身体が転がっていた。

意識を完全に失い、死体の様にまるで反応の無いヤクザ男の上着の中やズボンのポケットに若者は手を入れると、ゴソゴソと財布を捜し始めた。

「此奴は三万か・・・」

男の財布から現金だけを抜き取ると自分のジーンズのポケットに押し込んで、空になった

財布をポイッと投げ捨てた。

「此奴は、たった五千円か・・・ケッ！湿気てやがるぜ！」

こうして、若者は次々と現金を探して奪い取ると、死んだ様に横たわる男達を残して闇の中に消えて行った。

「アッ！きついわ！・・・こんなの初めて！」

命を的にした格闘の血腥い興奮の余韻を醒ます為か、若者は、安い連れ込み宿のベッドの上で、街で買った女の肉体に背後から己のいきり立ったモノを突き立てていた。

「アッアッ！・・・強いわ！」

犬の様に四つん這いにした女の秘裂に滾り立った肉棒をまるで地面に杭を打ち込む様に何度も乱暴に叩き付けた。

柔らかな秘肉を押し開き、長く太い怒張がその根元まで打ち込まれる度に、その反動で腰を揺すり、ハアハアと早い息の下で悲鳴とも喘ぎ声ともつかない叫び声を上げながら、上体を仰け反らし、流れ出す汗の飛沫を飛ばしていた。

「アア・・・もう駄目・・・お願い、許して！」

女は、背後から突き立てられながら、早い息を吐き、白目を剥いて、上体を反らせ、切れ切れに哀願の声を発した。

売春婦は客を早くイカせるために、感じてもないのに大げさな声を上げて感じているかの様に演技をするものであるが、この底無しの精力を秘めた野獣の様な男に対しては、演技する余裕すら無かった。

これまで身体を預けた客の中でも経験した事が無い程、太く硬い男のモノを持っており、最初に突き立てられた時は、まるで赤く熱した鉄棒をねじ込まれる様な、膣壁を無理矢理押し広げられる苦痛に白目をむいた程であった。

グイッと根元まで押し入れられた硬い肉塊に柔らかな膣壁の襞が絡め取られ、石の様に硬化した亀頭に子宮口が押し潰されそうな恐怖を感じた。

その圧倒的な男の精力と、ズキズキとする苦痛に呻吟させるだけで何も快感を与えること無く、一方的に女体から快樂を貪り取ろうとする男の独善的なセックスに、目の前に地獄から這い出して来た鬼が出現して抱きすくめられているような空恐ろしさを感じるのであった。

隙間無く肉洞を埋めた怒張をユックリと抜き差し始めると肉襞が外部に引きずり出され、

また押し込まれる感覚を味合わされた。

「アアッー！痛いわ！」

男の持つ凶悪な男根に秘肉を押し広げられる苦痛に、演技を越えた悲鳴を漏らし続けた。そんな悲痛な叫び声を上げる街娼に、「この薄汚いマ●●●に何人もの男を啜え込んでいるくせに、昨日今日処女を失った女みたいに、何を大げさな声を上げているんだ！」と、笑いながらパンパンと尻を平手で叩いて、両手で媚肉を無理矢理左右に押し開き、大きな音を立てて、いよいよ激しく打ち付けるのであった。

もう何十分にも渡って男に貫かれ続け、背後から追い立てられるようにイカされ続け、最早、娼婦には男に媚びて、感じている艶技をする余裕も無く、圧倒的な精力を持った男に翻弄されるだけであった。

女体の尊厳に対する畏怖心も無く、ただ暴力的な男の繰り出す性行為の前で、心地良い性感を味合う事無く、まるで髪を掴まれて地面を引きずり回される様に、無理矢理、何度も何度も立て続けに頂点まで昇り詰めさせられてた。

快感を逸脱した苦痛と恐怖に逃げだそうとしたが、ガッシリとした男の力に抱き締められて、また男に抗って身を避ける体力も残っておらず、まるで嵐の海の中で大波に揉まれる小舟の様に、ただ男の精力の前に弄ばれるだけであった。

太い剛棒が、良く使い込まれた柔らかな女の祠を貫く度に、夥しい愛液がビュッと噴き出し、周囲に淫靡な音色を奏でていた。

これまで何人もの精力の有り余った男達を客として来たベテランの売春婦といえど、この男の前ではまるで勝負にならないことを身を以て思い知らされ続けた。

桁違いの精力を持ったこの男に貫かれ、これまで何度も絶頂まで追い上げられ、心臓が破れそうな程速く強く鼓動を打ち、身体はズキズキと痛み、頭はガンガンと金槌で殴られるような痛みを感じていた。

自分はこんなに切羽詰まった状態に追い詰められているのに、自分を責め立てるこの大男は、まだ自失の気配さえ示さない。

このままこの若者の激しい身体の動きに煽り立てられ、またしても絶頂に追い上げられてしまったら、自分の身体は完全に破壊されてしまうのでは無いだろうかーと、苦痛にも似た込み上げる絶頂感の嵐の中で、際限なくイカされる恐怖に悲鳴を上げ続けた。

そんな女の悲鳴に関わらず、男は先程ヤクザ者達を半死半生にさせた残忍さを今は、目の

前の弱い女性の身体に振り向ける様に、益々凶暴さを増して責め立てるのであった。

この狂った様に娼婦を責め立てる若者には、女とのセックスを肉体的快感を得る為の手段としていないように窺えた。

男達に対しては血腥い暴力で完膚無きまでに叩きのめし、女達には有り余る精力で悲鳴を上げさせ、女が完全に意識朦朧状態となるまで絶頂の淵に追い詰める事に快感を求める様なドス黒い欲望を秘めているかに見えた。

それから、更に半時間に渡り、無抵抗な街娼を責め続け、完全に意識を喪失し、ピクリとも反応しなくなった身体の中に溜まりに溜まった精液をドクドクと流し込んだ。

意識の無い女には、若者が最終的に自失した事も判らないようであった。

男は自らを剛沢と名告っていた。

勿論本名では無い。

ヤクザ者を殴り倒し、金を巻き上げる危険な稼業の間に、幾度も変名を使って来たのだった。

今剛沢の仰臥するベッドの隣には、散々剛沢に突き立てられ、何度も無理矢理絶頂地獄を彷徨わされたあげく、失神状態に陥ったまま死んだように横たわる街娼が居た。

しかし、まだ死んでいない証拠に、激しいセックスの名残の様に、女の胸は激しい呼吸で上下に動いていた。

長時間に渡って剛沢のモノを受け入れていた肉の洞窟は、閉じる機能を完全に喪失して、パツクリと赤黒い内部を晒していた。

布団も掛けずベッドの上に仰向けに横たわる女のしどけなく開いたままの股間からは、女の身体から染み出した愛液と剛沢が放出した体液が肉洞内で混じり合い泡を浮かべて滴り落ちていた。

剛沢の冷ややかな視線を受けている間に、ふと意識を取り戻した女が、突然、「いけない！こんな時間！行かなくちゃ！」と、叫んで慌てて跳び起きた。

ガンガンと痛む頭と、力の入らない腰付のまま、脱ぎ散らかした衣類を両手に抱え、全裸のまま、大急ぎでベッドから飛び降りようとする女の手首を剛沢が掴んだ。

「おい、慌てて何処に行こうてんだ？時間ならまだ充分あるぜ。」と、残酷な笑みを浮かべて女を睨み付けた。

剛沢の鋭い視線に射すくめられ、痺れた様にベッドの上に力無く腰を降ろした女を残して、

剛沢は自分のジーパンに脚を通した。

そして、上半身裸のまま安ホテルの部屋の扉に忍び寄り、表の様子を窺うようにした。

目は油断無くベッドの上の女を見詰めていた。

剛沢の野獣の様な視線に怯えた女は、ベッドに腰を降ろしたまま声も上げられずにいた。

突然、剛沢がドアをパッと開けた。

ドアにもたれ掛かって中の様子を窺っていたヤクザ男が部屋の中に転げ落ちて来た。

更に剛沢は部屋の外に手を伸ばすと表にいたもう一人のヤクザ者の首を掴んで中に投げ入れた。

戸口で倒れていた男の上に折り重なるようになって身動き出来ない二人の顔面に鋭いキックをお見舞いした。

表で待機していた更に二人の暴力団員が、奇声を上げて部屋に雪崩れ込んで来たが、奇襲の効果を喪失していた襲撃者には喧嘩慣れした剛沢の敵では無かった。

狭い部屋の中で長ドスを振り回そうとしたが思うに任せず、近距離から剛沢のパンチを受けるのであった。

狭い安ホテルの部屋の中には死んだように失神して身動きしない男達が転がっていた。

何時もの様に剛沢はそんな男達の懐を探り金を巻き上げていた。

ベッドに蹲ったまま街娼の女が、凄まじい男の争いを目の当たりにして、青い顔をして身体をガタガタと震わせていた。

「とんだ余興が入ったが、臨時収入も入ったことだし、時間を延長して楽しもうじゃないか？」

と、皮肉っぽい笑みを浮かべると、返り血を浴びたジーンズを脱ぎ捨て女の^{うずくま}蹲るベッドに上がって来た。

恐ろしい暴力の現場を目の前にした恐怖で、剛沢の言葉も耳に入らないのか、女は瞬きも忘れて目をカッと見開き、全身を蒼白にしてガタガタと震えていた。

そんな恐怖で金縛り状態に陥った無抵抗の女をベッドの上に乱暴に俯せに押し倒し、力の抜けた女の腰に手を掛けて持ち上げると、お尻を突き出す姿勢を取らせた。

そして、その剥き出しとなった後口に自らの怒張を宛がった。

この若者には暴力と性欲が同一化しているのか、激しい暴力の余韻で^{たぎ}滾り立った全身の血液が股間に集中しているかの様に、今剛沢の男のモノは熱く硬くそびえ立っていた。

剛沢の灼熱した鉄棒の様に熱く硬い物が秘められた菊座に触れたのを感じて街娼がヒッ！と呻き声を上げて身体を震わせた。

女は長く男に身体を売る生活をしていたが、肛門性交の経験は無かった。

そんな初めての後口に、剛沢の熱鉄の様な硬くて太い肉塊が襲い掛かった。

「其処は・・・違う！」

長年自分の商売道具として来た前の穴でも押し広げられる痛みを感じた男のモノを未経験の後ろの穴に突き立てられるという恐怖が込み上げて来て悲鳴を上げた。

剛沢は女の悲鳴も気にせず、必死に的を逸らそうとする腰の動きを強靱な身体で封じ込め力尽くで後口を犯そうとした。

剛沢の巨大な物が、恐怖の緊張で強く閉ざされた肛口に押し当てられ、メリメリと菊の花の様な皺を押し広げて、侵入しようとしていた。

余りの激痛に女は必死に身を藻掻かせ逃げようとしたが、剛沢の強力ごうりきに阻まれ抱きすくめられてしまった。

身体を引き裂かれる恐怖に、ジタバタと身悶える女の抵抗を無視して、ピッタリとその部分に押し当てられた剛沢の巨大なモノが、固く閉ざされていた禁断の門をこじ開け、内部に侵入し始めていた。

剛沢の太い肉塊を後ろで受け入れるためには、ベテランの女でも潤滑オイルを塗して、時間を掛けてマッサージして括約筋をほぐしておかなければ受け入れは不可能な程であったが、今恐怖で身体を硬直させ、潤滑されていない肉孔に巨大な肉茎が埋め込まれようとしていた。

女の口から断末摩の悲鳴が上がった。

剛沢は甲高い女の悲鳴を残忍な笑みを口の端に浮かべ、無視して、更に腰を押し進めた。

肛門周囲を護っていたリング状の括約筋がブツブツと切れる様な音がして、剛沢の硬直した物を隙間無く埋めていた肛口から血が流れ始めた。

脳天まで貫くような激痛に女はヒィヒィと悲鳴を上げて身悶えたが、その頃には女の腸内には剛沢の巨大なモノが半分まで埋め込まれていた。

剛沢は女の様子から、暴力団員から指示されて、自分を誘い込み、体力を使い果たさせ、ベッドで骨抜きになっている所を襲撃させようとしていた事を見抜いていた。

しかし、残念ながら剛沢の精を搾り取ってベッドの上に寝込んでしまうようにするには、余りにも女の能力は剛沢の精力に比べて劣っていたようだった。

剛沢は自分を罠に陥れようとした罪を思い知らせようとするかの様に、無慈悲に女の肉体内に怒張を突き立てた。

「へへ・・・血が流れて来て滑りが良くなってきたじゃないか・・・」

とうとう男根の根元まで肛門の中に押し込まれた時、女は激痛に白目をむき半ば意識を失っていた。

そんな女に息つく暇も与えず、そのまま腰を前後に振りたて始めた。

剛沢の太くて硬い雁首が腸内を掻き巻く衝撃に女は激しい悲鳴を上げ続けた。

格闘の際に溢れ出たアドレナリンと有り余る男性ホルモンにより、異常なまでの興奮状態に掻き立てられた剛沢は、その有り余る闘争心を哀れな女の身体を苛むことによりぶつけようとするかの様に女の身体に何度も太い杭を打ち込み続けた。

命を掛けた闘争で最高潮に達した興奮状態は、女の肉体内に幾度も男の精を放出しないと治まらない様に思えた。

剛沢の怪力にガッシリと押さえ込まれた女は、今は剛沢の肉茎が押し出される度に、低い押し殺した声を上げ、下半身がブルブルと反応を示すだけで、白目を剥いて心神喪失状態になっていた。

突然女の股間から温かい黄色い液体が溢れ始め、ビシャビシャと安いシーツの上に池を作っていた。

突然失禁始めた女の痴態に冷たい笑みを浮かべた剛沢は、動ずることなくグッタリとした女の尻をガッシリと抱え込み、自分を罠に落とそうとした女に罰を与えるように意識の無い女の尻をその後も長時間突き続け、ドクドクと精液を注ぎ続けた。

コップの中に並々と注がれた酒を一息にあおると、コツンと音を立ててコップをカウンターの上の白木の板の上に置いた。

安い居酒屋の親父が空になったコップに再び並々と酒を注いでくれた。

コップの中で静かな波を立てて注ぎ込まれる酒を見詰める内に、コップの両側に置いた手に視線が行った。

長年の血で血を洗う凄まじい暴力の間に、変形した両手・・・今ではまともに指を伸ばして開く事も出来なくなっていた。

じっと自分の両拳を見詰める内に剛沢の脳裏に初めてヤクザ者を殺した時の手の感触が込み上げて来た。

いや、本当に殺したのかどうか確かめた訳では無い・・・しかし死なないまでも一生残るような重傷を負わせた事は確かであった。

俺の生まれ育った家は下町で町工場を経営していた。

父親は確かな腕を持ち顧客からも信頼される職人で、若い工員を雇って来ては、自分の持てる技倆を惜しみなく伝授して腕の良い職人に育て上げると、気前よく工場を持たせてやり取り立ちさせてやるような、損得勘定に無頓着な気の良い男であった。

俺も幼い頃から父の姿を見て育ち、別に教えられた訳では無いが、見よう見まねで旋盤などの工作機械を操り、顧客の持ち込む凶面を見れるようになっていた。

決して豊かな家庭環境では無かったが、幸福感に包まれた時間を過ごしていた。

そんな剛沢の家族に悲劇が襲ったのは、剛沢が高校を卒業しようとしていた頃であった・・・

腕は立つが人を疑うことを知らないお人好しの父親が、頼まれて近所の町工場を経営する友人の連帯保証人になってしまったのだった。

資金繰りに苦勞していた友人は、ある日莫大な借金を残したまま、姿を消してしまった。

残された借金を取り立てる債権者が、連日俺の家を訪れるようになっていた。

その中にはスジの悪い金貸しも混じっていた。

昔面倒を見て、今は一端の工場経営者となっていた弟子たちも掌を返すように、父の窮乏から目を背けた。

債権を貰い受けた暴力団の悪質な組員が、毎日取立に家を訪ねるようになっていた。

口数は少ないが腕は確かで周囲から信頼されていた親父、そんな親父を尊敬して蔭から支えていた母・・・そんな夫婦も悪辣な取立のストレスから険悪な夫婦仲になり、毎日口論が絶えなくなっていた。

滅多に喧嘩することもなく、決して母に手を上げる様なことの無い父であったが、何時しか口論の最中に母を殴り付けるようになっていた。

ある夜、ヒステリックに親父の事を詰る母を殴り付けた時、母は泣きながら家を飛び出してしまい、そのまま二度と家に戻ることは無かった。

その日以来決して酒に強くは無かった親父は酒浸りになるようになって、仕事もしなくなってしまう・・・もともと、その頃には仕事の依頼もすっかり無くなっていたが・・・そして、ある日、学校から戻ると親父の姿も消えていた。

高校卒業まで後僅かに迫っていた俺は、せめて高校だけでも卒業しようと、人気の無くなった我が家から学校に通っていたのだった。

その日、何時もの様に学校から帰ると、工場を兼ねた家の上がり框に人相の悪い二人の男が腰を降ろしていた。

金目になるような工作機械は粗方売り払われ、ガランとした建物内で家人の帰りを待ち受けていたのだった。

工場のシャッターをこじ開けて、家人が戻って来るのを待っていたようだった。

何処から探してきたのか親父の残した、一升瓶の中に僅かに残っていた酒を茶碗に移して上機嫌で飲んでいた。

俺の顔を見つけると、陰険な表情を浮かべて近づいて来た。

何時もの様にネチネチと絡むように親父は何処へ行った？と、抜き身にした匕首で俺の頬をペチャペチャ叩きながら、猫が鼠をいたぶる様な馬鹿にしたような目で俺の事を見詰めていた。

陰険な暴力団員に邪険に問い詰められる内に、これまで堪えに堪えて来た怒りが沸々と湧き上がって来るのを感じた。

間近に酒臭い顔を近付けて、問い詰めるヤクザ者に対して、これまで鬱積した怒りが突然噴き出し、気付いた時に俺の拳はヤクザ者の顔面に叩き付けられていた。

俺の拳をまともに受け、圧迫された尾骨が粉々に砕けて、破壊された周囲の骨と共にグズグズと顔面に沈んで行く様子が拳を通して伝わって来た。

俺の正拳の前に叫び声を上げる余裕も無く、顔面を血で真っ赤に染めて、崩れ落ちて行く仲間を見て、もう一人の暴力団員が怒りで顔を真っ赤にして、匕首の鞘を抜き取ると襲い掛かって来た。

その時、俺は不思議と恐怖を感じず、何故か男の動きがまるでスローモーションの映画を見ているようにユックリと見えた。

俺の身体を目掛けて近づいて来る匕首の切っ先が青白く鈍く輝るのを見て、何故かゾクゾクとするような感覚を覚えた。

俺は紙一重で男の匕首をかわすと、そのまま匕首を持つ男の腕を掴み、身体を捻りながら相手の身体を自分の背に寄せ上げた。

そして、そのまま背負い投げで男の身体を工場の硬いコンクリートの床に叩き付けた。

柔道の受け身も知らず、コンクリートの床に叩き付けられた男は、一撃で腰の骨を砕かれ

た様であった。

骨盤を砕かれた激痛に声も上げられない男の顔面は蒼白となり、目には先程の尊大な光りは消え失せ、恐怖の色を浮かべて俺の方を見つめていた。

そんな男の腕を掴んだまま、背中に担ぎ上げ、再び男に背負い投げを喰らわせた。

鈍い音を立てて硬い床面に叩き付けられた男の背骨は砕かれた様に感じた。

顔面蒼白の男の目は、恐怖に打ち拉がれ、口が「助けてくれ」と動いたように感じた。

俺はそんな無力なヤクザ者に少しも憐憫の情を感じる事無く、再び背中に背負い上げ、床に叩き付けた。

男は最早完全に意識を失い、死んだようになっていた。

俺は、そんな意識の無い男を背負い上げ、何度も何度も思い切り床に叩き付けた。

床に打ち付けられる度に男の体の無事に残っていた骨が、一つずつ砕けていくのが判った。

数限りなく硬いコンクリートの上に打ちのめされグニャグニャになった男の身体は、まるで伸し烏賊の様に2割程も長くなった様に感じた。

何度も男を投げ続けながら、人に恐れられる暴力団の男がこんなにも弱いとは意外に感じた。

俺は小さい時から空手と柔道を習っていたが、それは人を傷付ける為ではなく、心と体を鍛えるために始めた物であった。

人一倍体格と体力に恵まれた俺は、めきめきと頭角を現し、大会に出場して何度も優勝を飾るまでになり、大学への推薦も約束されていた。

あくまでもスポーツとして練習して来た、空手と柔道であったが、今無力なヤクザ男を痛め付けながら、自分の心の中に残忍な野獣性が沸き上がって来るのを感じていた。

俺は二人の死体を残したまま家を出た。

街角のテレビのニュースでもその事件の報道はされなかった事を見ると、その暴力団の組も自分の所の組員が素人の高校生に鬪り殺された一と、警察に訴えることを恥じて、内々で処理したのであろう。

しかし、組のメンツにかけて目の色を変えて俺の事を探しているのは間違い無かった。

俺はそのまま山奥の工事現場に隠れ、時を待った。

雪に閉ざされた山奥の過酷な工事現場を何件も掛け持ちする間に、俺の人間性は全て掻き消され、再び俺が街に舞い戻ってきた時は、一匹の冷酷な野獣と化していた。

ヤクザを殺すヤクザとして・・

「おいおい！また和久井先生の講義が始まったぜ！」

傍に陣取る男達が上げる大きな笑い声に追想が消し去られた。

ふと声のする方を見ると、二人の日焼けした頭の禿げ上がった中年の労務者風の男に挟まれて、一人の中年男が苦虫を嘔み潰したようにカウンターに座っていた。

ゲラゲラと大声で笑い上げる、酒に酔って真っ赤な顔の中年男は、如何にも教養の無さそうなそこの労務者風であったが、間に挟まれてカウンターに俯せになる、中年男は、荒んだ生活を送っているようで痩せて肌の艶は悪く、額も薄くなっていたが、何処かそこいらにいる酔っぱらいとは違う雰囲気を感じ取られた。

普段はそんな酔っぱらい同士の話には加わって行かない剛沢であったが、何故かその時は不思議と興味を引かれて、知らぬ内に男達の傍に寄って行った。

「おいおい、どうしたと云うんだ？」

和久井と呼ばれた中年男をからかっていた二人の酔っぱらいは、新しく話に加わって来た若者に気を良くして、「おお！兄ちゃん！聞いてくれよ！この風采の上がない酔っぱらいはよー！K大医学部の出身で、数々の難しい手術をこなして来た、優秀なお医者様だったーて、言うんだぜ！」と、面白そうに和久井の背をごつい手でバンバン叩きながら笑い声を上げた。

コップ酒を手に握り締めたままカウンターに蹲る和久井の隣に剛沢は席を占めた。

そして、一言二言声を掛けたが、俯いたままの和久井はジロッと剛沢の方を見ると、めんどくさそうな目を浮かべた。

それでも剛沢が何か語りかける内に、少しずつは言葉を返すようになって来た。

孤独な野獣の様な生き方をして来た剛沢であったが、何故か和久井に自分と似た雰囲気を感じ、親近感を覚えた。

「おい！和久井先生よ！俺と組まないかい？CTスキャナーでも何でも買ってやるぜ！」

と、気難しい表情を浮かべる和久井に声を掛けた。

まさか将来それが現実のものとなるとは剛沢自身想像もしていなかったが、何故か予感じみたモノを感じ、無意識の内に言葉として出ていたのであった。

当時日本に数台しかない高額な医療機器を買ってやると声を掛ける浮浪者の様な若者にすっかり酔いが回った二人の中年男は、ドッと笑い声を上げた。

俺が奢るから飲み直そうと、剛沢が和久井を連れて一杯飲み屋を後にした。

最初はその気が無い様な和久井ではあったが、何故か剛沢の方からその場で分かれ難く感じ、二人だけで飲みたいと、強引に連れ出したのだった。

飲み屋で酒を勧める間や、そして次の酒場を探し連れだって歩きながら、問わず語りにボソボソと話す和久井の話をまとめると、

和久井は日本でも有数の大学病院を持つ K 大学の医学部を優秀な成績で卒業し、そのまま研究室に残って医療に従事していた。

数々の難手術をこなしたり、新しい治療技術を研究し確実に成果を上げていた。

もっともその研究成果は上級の教授連中に盗られ、和久井の名前で学会に報告されることはなかった。

ところが、自分の地位や名声に全く無頓着な和久井は、好きな研究さえ出来れば一と、気にする事は無かった。

和久井の研究成果を横取りして学会での名声を得ながらも、そんな頭角を現す和久井に自分の地位を脅かされるのではないかと、不安に駆られた教授連中が密かに嫉妬心を持つようになって行った。

和久井自身は新しい治療技術の研究や難しい手術を成功させ患者の命を守ることに生きがいを感じるだけで、院内の政治的動きには全く興味が無かった。

しかし、猜疑心に駆られた教授連は、折から露見した重大な医療ミスのスキャンダルの責任を押し付け病院から追放してしまった。

実はその医療ミスは教授の息子で K 大病院に勤めていた医師が犯したもので在ったが、幸便に和久井に罪を擦り付け、息子を守り和久井を追放したのであった。

それは、和久井にとって全くの濡れ衣であったが、どの派閥にも属していなかった和久井を擁護する者はいなかった。

大学病院には和久井と結婚の約束をした女医がいたが、和久井が病院を追放されると、冷たく和久井から離れ、こともあろうにその教授の息子と結婚してしまったのであった。

それ以来、すっかり世の中にも人間にも幻滅してしまい、無気力で厭世的な生活を送り、酒に溺れながら今日まで来てしまった一と、云う事など。

連れだって歩きながら、剛沢には、この酒焼けした風采の上がない中年男がそんな輝か

しい経歴の持ち主とは信じられない思いでチラチラと和久井の方を見た。

しかし、これまで多くの無教養な男や粗暴なだけの男を見て来た剛沢には、この頬骨が浮き出た痩せた中年男から何か違う雰囲気を感じるのであった。

次の酒場を探す内に、前方に異様な男達が立ち塞がるのを見た。

剛沢は無言で和久井をさがらせると、嬉しそうな表情を浮かべて、カタギには見えない男達に自分の方から近づいて行った。

「今日はもう店じまいにしようかと思っていたが、お客さんの方から来られては仕方無いな・・・特別に残業してお相手してやるぜ・・・」

ニヤニヤしながらヤクザの団に声を掛ける剛沢に、ふざけるな！と叫ぶと手に手に七首を握って剛沢を取り囲んだ。

電信柱の陰で恐ろしげに様子を見守っていた和久井の前で男達の戦いが開始された。

7、8人の七首や長ドスを構えた男達が、剛沢を取り囲むと一斉に襲いかかった。

丸腰の剛沢は、素早い身のこなしで刃の切っ先を寸での所で交わすと、そのまま長ドスを振り回して体勢を崩した男と交差した瞬間に男の顔面に拳を喰らわせた。

剛沢の鉄拳をまともに喰らった男は声も上げずに地面に倒れ伏せた。

狂った様に激しく七首を振り回す男と剛沢が対峙している隙に、別の男が七首を手に背後から剛沢に襲い掛かった。

剛沢はまるで後ろにも目が付いているかのように、背後から突き掛かった七首を握る男の手を掴むと、そのまま目の前の男に向かって投げ付けた。

喧嘩慣れしていない様子でメチャクチャに七首を振り回す男の刃によって、投げ付けられた男の額から血飛沫が上がって悲鳴が聞こえた。

その後も四方から暴力団の男達が剛沢に襲い掛かったが、逆に剛沢から次々と撃破されてしまった。

さっきまでの男達の怒号と悲鳴が響いていた路地も今はシンと静まりかえり、電信柱にしがみ付いたまま恐怖に硬直した和久井の目の先には何人もの男達が地面に倒れ伏せていた。そんな男達の周りを回って、何時もの様に懐から財布を捜すと現金を奪って自分のズボンのポケットにねじ込む剛沢の姿があった。

一通りヤクザ者達から現金を奪った剛沢が落ち着いた雰囲気、和久井の隠れている電信

柱の所までやって来ると、怯えて身体を硬化させる和久井を促してその場を立ち去った。ついさっきまでの死闘が嘘のように平然とした様子の剛沢と並んで歩く内に和久井も落ち着きを取り戻しつつあった。

そして、ふと隣で歩く剛沢の左腕を見た時、夥しい血が流れ出ている事に気付いた。この鬼神の様に強い男も流石に大勢の暴力団員を相手にしている間に怪我を負った事が判った。

「お前、怪我をしているじゃないか？」

和久井が真剣な眼差しで剛沢に問い掛けた。

「なに、こんなこと何時もの事さ・・・ほっとけば、その内止まるぜ。」

と、心配そうな和久井の態度を無視するように、何食わぬ様子で応えるのであった。

「何を言っている！その出血は異常だ！ちょっと見せて見ろ。」

和久井は電信柱の灯りの下に剛沢を座らせる、袖口を捲り上げると傷付いた腕を見た。其処には暴力団の男の刃で深く抉られて、夥しく出血するザックリとさけた傷口があった。

「いかん！動脈が切れている！」

傷口を一目見た和久井が驚いて声を上げた。

急いで和久井は肩に掛けていた帆布製のショルダーバックから良く磨かれたステンレスのケースを取り出し開いた。

銀色に輝るステンレスケースの中には応急の医療器具が入っていた。

「こんな所で何も出来んが今は一刻を争う・・・痛いかも知れんが少し我慢しろ・・・こんな所で出血多量で死ぬよりマシだろう・・・」

と、腕の止血点を止血帯で固く結束すると、傷付いた血管の縫合に掛かった。

縫合の針と糸を手でセカセカと器用に動く和久井の指先をジッと見詰めながら、「どうやら、アンタが医者だったって事は、満更嘘じゃ無さそうだな・・・」と、呟く様に言った。

「当たり前じゃ・・・お前達がどう思おうと、俺はこれまで嘘を言った事は無い・・・」

作業の手を休めずに和久井が剛沢の呟きに応えた。

「取り敢えず、今出来る事はこの程度じゃ。碌な消毒も出来んから後で化膿してくるかも知れん。ちゃんとした病院で見て貰え・・・」

傷口の縫合を終了して、包帯を巻きながら言った。

「あんたを振ったと云う女医さんが開業しているのはこの近くだったな？」

和久井から聞いた話を思い出しながら剛沢が和久井の目を覗き込む様に聞いた。

「ああ・・・隣町で医院を開いているはずじゃ・・・」

剛沢の凶暴な目の光りに居竦まれた様に応えた。

和久井に罪を擦り付け世間からの追及を逃れた同僚医師であったが、流石に院内の目から逃れる事は出来ず、退職して和久井を振った女医と共同でクリニックを開いていたのだった。

元々大学病院の高度な医療技術に付いていくだけの能力も無く、裕福な家系に育ったその同僚にとって開業資金を調達する事は容易であったので、何時かは大学を離れ医院を開業するつもりでいたので、単にその時期が早まったに過ぎなかったのだ。

即ち、大学から追放される事はその男に取って、自分の犯したミスに対する何ら制裁とは為っていなかった。

「病院なら設備も整っているだろう・・・それじゃ、これから其処に行って、ちゃんとした治療を受けさせて貰おうか・・・」

立ち上がると、有無を言わせぬ様子で和久井を伴って歩き出した。

その医院は静かな街外れに在った。

かつては、和久井と同僚だった医師と結婚して二人で開業した医院であった。

表に掲げられた看板には、山岡クリニックと大書され、その下に山岡路夫と山岡美代子と二人の医師名が連記されていた。

かつて結婚を意識した女の姓が、和久井から恋人を奪った同僚の姓に改姓されて記されている事実を見て、あらためて苦々しい気持ちとなった。

今日は大型連休の前夜であり、日曜と祭日が休診日と記された看板を見て、時間はタップリあると剛沢は、ほくそ笑んだ。

3階建てで1階は医療施設となっており、外来専門で、入院設備は無く、2階と3階が二人の居住施設の様であった。

夜もとっぷりと暮れ、窓の明かりは全て消えていた。

真夜中の閑静な住宅街の家々も今は寝静まり、灯りの点いている家は無く、通りにも人影は無かった。

通りに面した部分は受診者が利用する駐車場と大きなガラス張りの入り口があった。

「こう云う所は、自分達の住居に直結した入り口が在るものだ・・・」と、剛沢が言う様に正面から裏に回った奥に玄関があった。

「お誂え向きに、通りから見えにくい所に在って助かるぜ・・・」

不敵に笑みを浮かべると、懐から何やら小さな金属の棒の様な物を取り出し、玄関の鍵穴に差し入れた。

差し込んだ金属棒をガチャガチャと動かす剛沢に、「お前、何時もこんな事をやっているのか？」と、問い掛けた。

「何時もじゃないが、こんな稼業をしていれば何でもやるさ・・・」

和久井の問いを無視するように作業を続けた。

「ほら、開いたぜ・・・」

玄関の鍵を難なく解錠した剛沢は扉を開いて、和久井の腕を掴むと建物の中に導き入れた。和久井は何か判らない大きな犯罪に自分が巻き込まれて居る事を意識して恐怖を感じたが、隣にいる剛沢から有無を言わせぬ威圧を受けるのであった。

和久井を招き入れ、元通り玄関の扉を閉めると、小声で、「アンタは此所に居ろ。」と、命じて、暗い建物の奥に剛沢の巨体が消えていった。

自分は一体何をしているのだろうか？こんな所に居るより、早く此所から飛び出して警察に掛け込んだ方が良いのでは無いだろうか？」と、自問を続けたが、ここで剛沢を敵に回したら、先程目の当たりにした、剛沢の俊敏な動きと、必殺の鉄拳が自分に襲い掛かるのでは無いかという恐怖で身体が動かなかった。

剛沢が闇の中に消えてから、薄暗い玄関口でまんじりともしない時間が流れた。

その間どれ位時間が流れたのか、悶々とする和久井には判らなかった。

不意に廊下の灯りが点って、奥から剛沢が手招きした。

剛沢に呼ばれるままに、半ば放心状態で家の中に進み行った。

剛沢が招き入れたのは、リビングルームであった。小振りだが豪華なシャンデリアで照らし上げられた室内には豪華な調度が並べられ、二人の生活の豊かさを感じさせられ、落魄した今の自分との差を見せ付けられる思いとなった。

ふと豪華な絨毯を敷き詰められた床面を見ると、二人の男女が寝間着姿のまま雁字搦めに縛り上げられ、床の上に転がされていた。

口には嚴重に猿轡が咬まされて声を封じていた。

手拭いの猿轡が厳しく口に食い込み顔面は醜く変形していたが、その二人は紛れもなく結婚を誓った元恋人と元同僚であった。

二人は突然の侵入者に怯え、恐怖の色を目にたたえ、侵入者の一人が和久井である事に気付かない様子であった。

もっとも今の不健康な生活で痩せさらばえ、垢染みた不潔な身なりの和久井を見ても気付くはずも無かったかも知れないが・・・

「どうだい？和久井先生よ・・・久しぶりのご対面で嬉しいか？」

剛沢が呆然と立ち竦む和久井の方を振り返って、笑いながら声を掛けた。

無神経に自分の名前を呼ぶ、剛沢に怒りを覚えたが、突然異常な事態に直面し、恐怖でガタガタと身体を震えさせる二人には、剛沢が呼びかけた、和久井という比較的珍しい名前にも反応した様子は見られず、怯えた目線で和久井の方を見つめた。

浮浪者同然の落魄れた生活を送る今の和久井には、自分とは別世界の贅沢な生活をいとむ二人が自分に気付いていない事に少しホッとしたように感じた。

出来れば、自分の事をこのままずっと気付かれずにいて欲しいと願った。

「二人の間に未だ子供は居ないようだな？まだ若い新婚さんみたいなピチピチの身体をしているじゃないか？」

剛沢が床に横たわる女のパジャマのズボンをずり下げて、ピンク色のパンティを履いた尻をむき出しにした。

歳は30歳半ばになっている筈であったが、柔らかな大きく張った尻が晒し出されて、和久井の目を釘付けにした。

病院勤務時代の印象しか残っていない和久井には、全体に小柄で華奢な白衣姿の恋人の姿しか記憶に無く、その白衣の下にこんなにも悩ましく盛り上がった、ボリュームのある腰回りをしていただけと意外な驚きを受けた。

縛り上げられてまま隣に横たわる夫が、自分の妻に突然の狼藉を始めた剛沢に抗議するように呻き声を上げた。

「良い歳をしてやがるが、まだ弛みの無いピチピチ肌の熟れた尻をしているじゃないか・・・」

そんな男の視線や呻き声を無視して、綿の薄い下穿きの上から豊満な尻を大きな掌で撫で続けた。

「柔らかくて揉み心地の良いデカイ尻だぜ・・・それに良い匂いがするじゃないか・・・」

突然ピンクのパンティを尻たぶの半ばまで押し下げられて、女が激しく悲鳴を上げて腰を震わせた。

「随分金を掛けた立派な屋敷じゃないか？お陰で防音もしっかりしているようだ。思い切り悲鳴を上げて構わないぜ・・・」

と、外部に助けを呼ぶ様に大声で悲鳴を上げ続ける女に冷たく応えた。

パンティを捲られ染み一つ無い白桃の様に柔らかな臀肉とその二つの柔らかな丘陵の間に形作られた谷間が露わとなった。

豊かに脂肪を載せた雪の様に白い尻を半ばまで露出させたまま、剛沢が嬉しそうに笑い出した。

「今お前達の寝室を見て、面白い物を見つけたぜ・・・」と、剛沢が何やら手にして淫靡な笑いを浮かべた。

それは、女性器を愛撫するために使うバイブレーターであった。

「お前達、何時もこんな物を使って乳練り合っていたのか？」

と、薄ら笑いを浮かべながら、バイブのスイッチを入れた。

モーターの振動音を上げながらクネクネと蠢く、男性器を模したピンク色の柔らかな樹脂製の切っ先を狼狽する男の目の前にかざしながら嬉しそうに笑い声を上げた。

夫婦の間の絶対の秘密を見知らぬ男に見つけられた羞恥に、青ざめていた顔を赤く染めて、女が止めてくれと言うように呻き声を上げた。

勉強と仕事一途で育って来て、性に対しては全く奥手であった和久井は、これまで恋人との間に性交渉は無く、女を一方的に神聖視して、肌に触れたり、口付けすらした事も無かった。

そんな清純な女神の様に崇めていた女が、こんな下劣な器具を使用して夫婦の夜を営んでいたのかと思うと、心の中でこれまで築き上げて来た何かがガラガラと崩れ落ちるのを感じた。

「まだ夜は長いぜ・・・これからお前らの愛用の品々を使って楽しもうじゃないか？」

床に寝かせていた女の両脚を揃えて縛っていたロープを解くと、必死に抵抗してバタつかせる女の足を押さえ付けて、穿いていたパジャマのズボンを力尽くで、脱がせた。

男の力に抗って、必死に身体を揺する女の太股を覆う柔らかな脂肪がフルフルと揺れ、白

くムッチリとした両脚が蠢く様子が、和久井の目に艶めかしく映った。

剛沢はパジャマのズボンを筆り取られ、ピンクのパンティー一枚となった女の両脚を傍に在った長い箒の柄の両端に括り付けた。

両足首を頑丈な箒の柄に固定され、女の両脚は扇の様に大きく広げられていた。

先程剛沢からずり下げられたままのピンク色のパンティーが辛うじて股間を隠していたが、端から僅かに覗く黒々とした艶のある陰毛に和久井の目は奪われていた。

女を開股に固定し終えた剛沢が、さてと一と言うように手を叩いた。

「さてと、こうして美人の先生が、こうやって股をオッピロゲて、待っていらっしゃる事だし、いよいよ奥の院のご開帳と行こうか・・・」

剛沢が鉋を手にしてニヤニヤしながら呟く様に言った。

股を表に向かって大きく広げられた状態で、暴漢の淫靡な目から自分の恥ずかしい部分を護っている最後の盾のような薄い下着を奪い去られようとしている事を意識してイヤイヤと激しく首を振った。

目に涙を浮かべ哀願の視線を送るのを無視して、薄笑いを浮かべながら、

「動くとは怪我をするぜ・・・」

と、ミルクを練った様な白くすべやかな肌理の太股とパンティーの間に鉋を差し入れた。

女の羞恥心を掻き立てるため、わざとゆっくりと鉋を入れ、ジョリジョリと布地を切り裂いて行った。

突然侵入して来た見知らぬ男に恥部を見られるという、恥ずかしさと恐怖に堅く閉ざした女の中から涙が流れ落ちた。

「ほら、切れたぜ・・・」

鉋によって切り離された布切れがハラリと落ちて、その下に隠されていた雪の様に白い地肌が露わとなった。

侵入者に、夫しか知らない女体の秘密の場所を露出するという羞恥に女は激しく首を振った。

そんな女の仕草を無視して、剛沢は鼻歌を鳴らしながら、もう一方の太股と布地の間に鉋を差し入れた。

やがてもう一方の太股の上の布地も切り落とされた。

箒の柄に両足首をくくられ、両脚を扇の様に開いて、床の上に仰向けに横たわる女の中心部分に切り取られた布切が頼りなく乗っていた。

少しでも身体を動かせば、秘所を暴漢の目から隠している下穿きの切れ端が滑り落ちそうな状態で、女は身動きを止めた。

和久井や夫が見詰めるシンとした室内の空気の中で、何事も無いように剛沢の指は伸びて、僅かに股間に残っていたパンティの切れ端を摘んだ。

剛沢の僅かな指の動きで、羞恥の部分を隠していた布切れがハラリと落下した。

その跡からびっしりと繁茂する黒い縮れ毛が現れた。

「これは端正な顔に似合わない結構な剛毛じゃないか？」

剛沢がニヤケた顔で羞恥に咽ぶ女をからかった。

女の背後に回って、ガッシリと縛り上げた上半身を引き起こすようにすると、

「和久井先生よ！あんた昔の恋人の此所を見た事があるかい？」と、間近に立ちつくす和久井に声を掛けた。

かつての恋人に再び自分の事を思い出させるような剛沢に怒りを覚えながらも、純情で恋人の手も触れた事も無かった和久井は激しく首を振った。

剛沢が繰り返す『和久井先生』と呼ぶ間にふと記憶が呼び覚まされたのか、ビクッと身体を震わせると、目を見開いて和久井の方を見詰めた。

その恐怖に震える目には落魄して痩せさらばえた和久井の今の姿が昔の颯爽とした青年医師とはどうしても結びつかない混乱が在った。

そして、この侵入者たちが単なる強盗では無かったと理解してゾッとする様な恐怖心に苛まれた。

「まだ見た事は無かったようだな・・・それじゃこれから良く見せて貰うが良いさ・・・」

と、言うとお体を支えていた両手を前に回した。

そして、豊かに繁茂した春草を左右に掻き分け始めた。

剛沢の突然の狼藉に女はイヤイヤをする様に大きく顔を左右に振った、

女の羞恥の素振りも気にせず良く動く両手の指で、その中心部を露わにした。

「へへ・・・見えて来たぜ・・・何だよこれは！随分やり過ぎてドドメ色をしているじゃないか?! お前達結婚してから毎晩ヤリ狂っているのか？」

色素の沈着した肥大した陰唇をむき出しにして笑い声を上げた。

明るい部屋の灯りに照らし出され、ムッチリと脂肪を溜めた太股の奥に秘められた鮮やかな色彩を帯びた部分が隠しようも無く露出していた。

男の暴力の前で、むき出しにされた割れ口は、羞恥と恐怖でまるで何かを言いたげにピクピクと蠢いていた。

恥ずかしい女の源泉を侵入者に見られる強烈な羞恥に剛沢の指先で剥き身にされながら、激しく首を振り身悶えた。

「こうして下を丸出しにしているのに、上だけ隠しているというのも変だな・・・」

と言うと女医の上半身を起こして背後から身体を密着させながら、唯一身に残っていたパジャマのボタンを外し始めた。

雁字搦めに縛られた身体を身悶えさせて、羞恥に全身を赤く染め、剛沢の作業に抵抗しようとする女の体温が上がり、身体から得も言われぬ香りが立ち昇り、ぴったりと身を寄せる剛沢をウツトリさせた。

上半身を緊縛するロープの上からパジャマのボタンを全て外して、着物を左右に押し広げると、ロープの隙間から胸に手を差し入れ、乳房を驚掴みにして表に引き摺り出した。

絶望的な呻き声がタオルで覆われた女の口から上がった。

胸の上をガッチリと縛る縄の間から撓わな乳房が垂れ下がった。

「これは、これは、全くの巨乳じゃないか！柔らかくて指にしっくりと馴染んで揉み心地が良いぜ！」

背後から女の豊満な両乳房をセカセカと揉み上げながら感激した様な声を上げた。

「まったくこの色っぽい体付きといい、デカイパイオツやイヤらしいケツといい、あんた女医をやっているなんて間違っているぜ！ポルノ女優になれば随分と稼げたぜ！」

女が剛沢の手捌きに身悶えるのも構わず吠え立てるように言った。

「あんた、こんな良い女を嫁さんに出来て幸せだな！毎晩ヤリ狂うのも無理は無いや！」

と、愛妻の乳房を揉み上げる様子を亭主に見せ付ける様にして叫んだ。

股間を大きく露出させたまま乳房を楽しそうに揉み立てる剛沢に夫が怒りに満ちた目で睨み付けた。

一仕切り縄で括り上げられた乳房を揉み上げたり、柔肌を撫で回して、女を羞恥に身悶えさせた後、

「さてと、それじゃ、そろそろあんたの愛用の玩具で遊んで上げようか・・・」

と、夫婦の寝室から持ち出した大人の玩具に手を伸ばした。

夫婦の夜の行為に使用していた秘められた器具を剛沢が手にしたので、赤面して顔を背け

た。

「これはこうやって使うのかい？」

ピンクローターのスイッチを入れるとジーとモーターの振動音が部屋の中に響いた。

ローターの先端で乳房や乳首を愛撫し始めた。

使い慣れた陰具の振動にアッと悲鳴が上がり身体が反応した。

女の緊張感を解きほぐして行く様に、ローターを身体のあちこちの性感帯に手慣れた様子で匍わせ続けた。

扇の様に大きく左右に開いた太股の上を隈無くさすって女の性感を昂進させた後、中心に開いた陰裂にローターを押し当てた。

アアッと女のシットリとした悲鳴が上がり身体がブルブルと震えた。

剛沢に弄ばれる女医も、発狂しそうになる恐怖と緊張感に晒され続けるよりも、今は淫蕩な性欲の淵に身を投げて、この忌まわしい現実から逃れたいと思うのか、剛沢の作業に協力するように身体を蠢かせた。

良く見ていろーと、言うように呆然と立ち竦む和久井の目を見詰めながら、バイブに手を伸ばした。

ブルブルと振動するバイブを女の秘裂にあてがった。

アウアウと悲鳴の様な呻き声を発して、女の身体がリズムカルに痙攣し始めた。

そして自分の愛用の陰具を自ら受け入れようとするかの様にジワジワと股間が潤い出すのが判った。

「へへ・・・こんな太いバイブを・・・涎を垂らしながら呑み込んで行くぜ・・・」

秘裂を押し広げ、陰肉を掻き分けてピンク色の陰具が女陰の中に埋没して行く様子が、唾然として見詰める和久井の血走った目に映った。

「へへ・・・こんな長いものが・・・一番奥まで入ったぜ・・・」

バイブの根元まで秘孔の中に押し込むと、バイブの振動に併せるように女の腰がブルブルと震えた。

そんな女の反応に満足した様に、女の性感を掻き揚げる様にゆっくりを操作を始めた。

ゆっくりと、そしてある時は、リズムカルに抜き差しを繰り返し、左右に捻るように動かして女の性感を煽り立てた。

何時しか上気した女の口からハアハアと甘い声が漏れる様になっていった。

最早猿轡の必要は無いと思って、女の口を厳しく縛っていた布を外した。

剛沢の器具の操作に煽られ、自由になった口を半開きにして、甘えるような呻き声を上げ続けていた。

「どうだ？良いか？」

剛沢が真っ赤に興奮した女に問い掛けた。

女が剛沢の問い掛けにうっすらと肯いた。

陰具の動きに併せてあーっ！ああーっ！と声を上げる女の後ろ髪を掴むと自分の方に引き寄せた。

激しく込み上げる性感の嵐に意識も朦朧となった女は、謎の侵入者の求めに応じて唇を与えた。

傍で縛り上げられたまま床に転ばされている夫が、突然の侵入者に身体を弄ばれ、憑かれた様に、熱い口付けを続ける愛妻の姿に抗議する様に呻き声を上げた。

ハアハアと呼吸も速くなり、後僅かで絶頂に達する事を見抜いた剛沢は、その直前で意地悪く陰具を引き上げた。

絶頂の寸前でお預けを喰らわされた女が恨めしげにアアーッ！悲鳴を上げた。

剛沢はそんな女の様子も気にせず、昇り詰めた女の性感を鎮めるように優しく乳房や全身を愛撫した。

そして、女が落ち着きを取り戻し始めた時、再びバイブを手にしてズブズブと股間の奥に沈めた。

一旦沈静化した性感が、熱く熱したままの油に火を点けられた様に一機に燃えさかり、剛沢に突き立てられながら、激しく身悶えを始めた。

一旦お預けを喰らわされた女体はそれを取り戻そうとするかの様に激しく身体を打ち振るわせ、股間の奥に沈められた物を喰い絞めた。

温泉の源泉のように熱い樹液を撒き散らして、腰を振りたてる女には、最早女医という威厳に満ちた姿は微塵も無く肉欲に狂う一匹の雌の姿しかなかった。

女が頂上を極めようとするのを認めた剛沢は、再び鉾先を引き上げてしまった。

剛沢に背後から抱かれたまま、満たされない肉欲に女は狂った様に泣き叫んだ。

この後も何度も入れては引き抜かれるという寸止めを喰らわされた女は、半狂乱の状態となって、「いや！抜かないで！このままイカせて！」と哀願の悲鳴を発した。

「良いだろう、最後は昔の恋人にイカせて貰え・・・」

剛沢が和久井に目配せした。

先程からの狂態に興奮した和久井は、薄汚れたズボンとパンツを降ろすと勃起した肉塊を露わにした。

女は、剛沢の巧みな性技の前にまともな意識も喪失していたが、目の前の和久井の股間に屹立するモノに新たに恐怖が沸き上がり、怯えた眼差しで見詰めた。

両脚を箒の柄に個縛され大きく股間を開いて仰向けに横たわる、かつて恋人の生々しい姿に逆上したように和久井は、憑かれた様に身体を浴びせていった。

熱い愛液を垂れ流す肉洞に垢まみれのモノをあてがうと一機に腰を進めた。

女も男の熱い肉塊を受け入れてウツと声を上げた。

そこは、女遊びをした事のない、和久井がこれまで経験した事も無い、柔らかく、暖かく湿った場所であった。

和久井は、かつて恋い焦がれた女の極上な内部に魅了され激しく腰を打ち付けた。

所が、女性経験は殆ど無い和久井は、二三次腰を振っただけで、その内部に熱い精液をぶちまけてしまった。

満たされない思いに女はヒステリックに泣き叫んだ。

「そんなにイキたいのなら、その男を奮い立たせて逝かせて貰うしか無いだろう・・・」

剛沢が女の両脚を縛っていた縄を解き、上体を雁字搦めに縛り上げていた縄を解いた。

女は自由になった手を目の前に蹲る和久井の股間に寄せ、一物を握り締めると顔を寄せて和久井のモノに唇を押し当てた。

和久井に対する恐怖と遺恨を込み上げる性感の渦の中に投げ込んで、現実から官能の中に逃避するかの様であった。

純潔の女神の様に神聖視して来た女に自分の穢れた物を口に啜えられ、思わず和久井はドギマギした。

そんな和久井の反応も気にする余裕も無く、立つのよ！立つのよ！と、ヒステリックに叫びながら、口に含み舌で不潔な物を扱き立てた。

そして、激しい舌使いに和久井の男根が元気を取り戻し始めたのを見ると、全裸の身体を和久井の上に預けて行った。

和久井の上に馬乗りになり、下腹に自らの下腹を押し付け、激しく腰を上下させた。

隣で床の上に転がされている夫も、自分の妻が突然の侵入者に激しく身体をぶつける様子を嘔然とした目で見詰めていた。

和久井の上に体を預けたまま、激しく腰を振る女の、一つに繋がった姿を床に腰を落とした剛沢が見詰めていた。

和久井のモノを深く浅く啞え込んだ食欲な女の下の方の口の直ぐ上に咲く可憐な菊の蕾も、男のモノが入り出す肉孔の動きに併せてピクピクと柔らかく蠢いていた。

そのピクピクと収縮を繰り返す蠱惑的な動きに魅せられた様に傍に寄ると、

「どうやらお前さんはこちらの方も活ける口の様だな？」

と、淫靡に収縮を繰り返す菊花の中心を指で押した。

「お前さんはこちらを使った事があるかい？」

指の腹でグリグリと撫で回した。

アアーッ！イヤ！そんな事無いわ！剛沢の指先で自分でも知らなかった新たな性感を指摘され、悲鳴の様な声を上げ身悶えた。

一方淫欲に狂った女に組み敷かれたまま、激しい女の腰遣いに翻弄される和久井はハアハアと荒い息遣いを続けていた。

激しい性感に翻弄された和久井は又しても女の体内に果ててしまった。

何もかも忘れて官能の雲の中に残酷な現実から逃れてしまいたい女は、満たされない性欲に狂った様に泣き叫んだ。

「仕方無いな・・・俺が引導を渡してやるか・・・」

女を満足させる事が出来ない和久井に呆れた様に呟くと、ゆっくりと立ち上がった。

そして、身に着けていた物を脱ぎ捨てると、その下から筋肉質の巨体が現れた。

体中にはこれまでの死闘で負った傷跡が幾つも残っていた。

股間から屹立する巨大な男根を、淫欲に悶える女の濁った目が物欲しげに見詰めた。

これまで幾人もの女を絶頂地獄に送り込んで来た剛沢の肉棒を秘孔に啞え込んだまま、女はハアハアと荒い息を吐き、全身を汗塗れにして腰を振り続けた。

その旺盛な性欲に剛沢も舌を巻く思いであった。

俺もこれまで色々な女を抱いて来たが、この女は一頭性欲が強いらしい。

旦那とのセックスだけでは満足出来ず、あんな性具を使うのも無理は無いと感じていた。今は、正常な認知力も失った様の一匹の性獣と化した女医は、ある時は剛沢の身体の上で嬌声を上げながら腰を振りたて、ある時は後背位で背後から剛沢に突き立てられ、何度も気をやりながら、今は剛沢に組み敷かれて喘ぎ声を上げていた。

剛沢の巨体の下で、ジュブジュブと恥ずかしい音を立てて秘孔を抜き差しされながら、身体を痙攣させる女の姿を観察して、この女ももう直ぐ絶頂に達すると気付いた剛沢は、

「和久井先生よ！この女もう直ぐ果てるぜ！トドメはアンタが刺してやんな！」

と、女の上に覆い被さっていた身体を退かせた。

今まで剛沢が突き立てていた肉洞は赤く充血し、ピクピクと妖しく蠢き、淫蕩な血流で熱を帯びて膨潤した媚肉の奥からは、湯気を立てるように淫靡な体液を止め処なく溢れさせていた。

その魔境じみた肉の祠に、魅せられた様に理性を喪失した和久井が自分の物を埋め込んで行った。

限界を間近に迎えた女が、和久井のモノを受け入れながら下半身をピクピクと痙攣させた。剛沢により決壊の淵まで追い込まれていた女は、和久井の狂った様に激しいピストン運動に煽り立てられ、絶叫を上げるとそのまま絶頂に達した。

かつての恋人が頂上を極めるのと合わせるように、和久井も思いの丈を女の体内に放出した。

柔らかな厚い肉に覆われた股間に密着させ、肉の無い痩せた尻をピクピクと痙攣させながら、熱い精液を女の身体の中に放出し続ける和久井を見ながら、

「和久井先生よ！満足したかい？」

と、尋ねるのであった。

縛めは全て解かれていたが、浜に打ち上げられた魚の様にピクピクと全身を痙攣させ、全裸のまま仰向けに横たわり、忙しなく息を吐きながら胸を上下させ、股間を閉じる力も喪失したように、しどけなく女の中心を晒したまま、その奥の院から得体の知れない淫液を垂れ流す女医を見下ろしながら、

「和久井先生よ・・・アンタ、この女の初物を貰うとは出来なかった訳だが、後ろの初物を頂くってのはどうだい？」

と、かつての恋人の胎内に何度も放出して腰が抜けたように床にしゃがみ伏し、痴呆の様

な表情を浮かべる和久井に話掛けた。

剛沢と二人でこの医院に忍び込み、その後想像もしていなかった淫蕩な嵐の中に投げ込まれて、脳髄は痺れた様になり、正常な判断を持ってなくなったままの和久井は、惚けたような表情で剛沢の方を見た。

「それには、まず腹の中の汚い物を出しておかないとな・・・幸い此所は医院で色々な物が在って助かるぜ・・・」

剛沢が診療室の用具入れから探してきた大きな硝子製の浣腸器を手に薄ら笑いを浮かべた。

ガラスシリンダーの中に楽しそうにグリセリン液を吸い上げていく剛沢の様子を見て、剛沢の意図を汲み取り、自分が女神の様に崇拜していた女の皮を剥ぎ取り、その奥に秘められた淫乱な性格を露わにただけで無く、更に落花無惨な姿を晒させようとする剛沢の残忍性に底知れぬ恐怖を覚える和久井であった。

200cc程の浣腸器の中が透明なグリセリン液で満たされたのを満足そうに眺めると、死んだように床の上に横たわる女医の仰向けの身体に足を差し入れ、ゴロンと俯せの姿勢に身体を回転させた。

そして、まだ意識が朦朧としている女医の脚に自分の脚を絡めると、グイッと大きく股間を拡げさせた。

明るいろビングの照明の真下に、女体の二つの秘宝が明々と照らし出された。

パツクリと拡げられた尻たぶの間に、今だにヒクヒクと小刻みに痙攣し、淫液を垂れ流す秘孔と、その上に普段排泄の用に資する恥辱の穴が、ほぼ真上を向いた状態でさらけ出されていた。

汚れを知らぬ女神の様に恋人を崇めていた和久井にとって、不潔な物を放出する淡く薄紫色の色素を帯びた器官をまざまざと見せ付けられ、また一つ心の中に秘めた物が壊れていくように感じた。

手にした大きなガラス製浣腸器の太い嘴管にワセリンを塗り付けた剛沢は、鼻歌を歌うように、その薄くセピア色に染まった菊花の中心に押し当て、そのままグリグリと内部に侵入を計った。

流石に意識朦朧としていた女医も剛沢の暴挙に気付いて、小さく呻き声を上げて、

「何をなさるの？お願い、もう許して・・・」と、か細い声で哀願するのであった。

女の悲鳴にも気にせず、剛沢は女の後口内に嘴管を全部埋没させた。

そして、ゆっくりとピストンを押して硝子容器内の浣腸液を女の腸内に注入し始めた。
アッアッと冷たい液体が腸内に侵入する刺激に女が腰を振るわせ、切れ切れの悲鳴を上げた。

コトンと音をさせてピストンを完全に押し切ると、女の尻穴から浣腸器を抜き出し、新たに容器内にグリセリン液を注入させ始めた。

剛沢達の狼藉に、雁字搦めに縛られ猿轡をされたまま隣で転がされた主人が抗議する様におめき声を上げ続けた。

夫婦の声も無視して、再び浣腸器をグリセリン液で満たした剛沢は、女医の排泄口にズブりとその先端を突き立て、ドクドクと汚辱の液体を注ぎ込み始めた。

2度のグリセリン液を注ぎ込まれ、たちまち女の状態に変化が現れた。

アアー痛いわ！と床に寝転んだまま、身体をくの字に折り曲げ、両手で腹を押さえた。

「もう効き目が現れ始めたようだな？これから腹の中の汚い物を出させてやるぜ！」

女の両手を後ろに回させると、簡単に後ろ手に縛り上げた。

グリセリン原液を400cc近く注ぎ込まれその強烈な効果が早くも現れ始めていた。

女は額に油背を浮かべ苦悶の表情を浮かべていた。

「此所でぶちまけると後が大変だから、バスルームでやらせてやろう。」

と、後ろで縛りにした女を立ち上がらせた。

「お前も結婚してから女房がウンコする姿を見た事は無いだろうから特等席で見せてやるぜ・・・」と、言うとは身動き出来ない程雁字搦めに縛り上げられ、憎々しげに睨み付ける主人をヒョイと肩に担ぎ上げた。

女は和久井に肩を押され、男は剛沢に担ぎ上げられてバスルームに連れ込まれた。

背後から追い立てながら、脂汗を額に浮かべ苦しげに身体を悶えさせる女に和久井は哀れみを感じた。

空の西洋風の大きなバスタブの中に身動きの出来ない男を仰向けに寝かせる様に置いた。

この豪華なバスルームのバスタブは男一人を横に出来るほど大きなもので在った。

先程女医を開股位に縛り上げた長い箒の柄を背中を通して全身を縛り上げていたため男は身体をくねらす事も出来ず、大人しくバスタブの底に横たわるしか無かった。

「それじゃお待ち遠様、好きなだけ糞を垂れるが良いぜ・・・」

と、言うとは剛沢は女の太股に手を掛けて軽々と持ち上げた。

背後から両太股を剛沢の大きな手で支えられる形で、股間を大きく広げさせられ、異様な

姿勢に女医が悲鳴を上げた。

当然、バスタブの隣に設置された洋風便座で排便させられると予想していた女は、剛沢の態度に狼狽えた。

そんな女の反応を他所に、女を前に抱えたまま、夫の横たわるバスタブの上に運んで行った。

腸内を襲う激しい痙攣に、今やヒクヒクと忙しく収縮を繰り返す排泄口は、仰向けに横たわる夫のすぐ真上にあった。

驚いて目をむく男に、

「お前も結婚以来、女房の尻の穴をこんなに間近から見た事は無いだろう」

と、うそぶくのであった。

愛する夫の真上から排便させようとする剛沢の目的を知って、女は激しく悲鳴を上げて身体を震わせた。

しかし、どんなに身体をくねらせても剛沢の強烈な力の前にガッチリと押さえ込まれて身動き出来ず、更に身体をくねらせようと力を入れると、肛門括約筋の力が抜け、今にも腸内で荒れ狂う排泄物の渦が溢れ出そうになった。

今は、兎に角、排泄を押し止めようと、額にビッショリ汗を浮かべギョッと眉根を寄せ、口を一文字に食い縛り、腸の内部からまるで搔き筆る様な痙攣運動と戦っていた。

下から見上げる僅か先には、排便の欲求を堪えてギョッギョッと強く収縮を繰り返すセピア色した菊花が見えた。

そして、その収縮の頻度と大きさは次第に強くなって来ていた。

会陰の周りも汗を浮かべ、その熱気が真下の夫の顔にも伝わって来ていた。

随分と我慢するじゃないかと、女医を抱えながら剛沢は感心した。

ゴロゴロ、ギョルギョルと腸内で荒れ狂う濁流の音が剛沢の耳にもハッキリと聞こえていた。

和久井を伴って現れた謎の侵入者の残酷な意図に気付いた男が、愛妻の排泄口の真下に位置する真っ青になった顔を激しく左右に振りながら、声に成らない悲鳴を上げ全身を身悶えさせた。

今や顔面蒼白になりながら、激しく頭を振って、固く結んだ口からウンウンと呻き声を上げながら、最後の瞬間を堪える女が居た。

「あなた！許して！」

突然女の口から悲鳴の様な声が上がった。

同時に男の口からも絶望的な悲鳴が上がった。

当に目と鼻の先で、これまで必死に堪えて収縮を繰り返していた水門が、その緊張を喪失して、外部に向かって開き、女医の腹内に溜め込まれた汚物が、土砂降りの雨の様に真下に横たわる夫の顔面に降り注いだ。

ビーとその場の空気を引き裂く様な大きな音を上げて、全開に捻った蛇口から強い圧力で水が吐出されるように、腸内の汚物を溶かして黄褐色に染まった大量のグリセリン液が夫の顔を叩いた。

妻の濁液をまともに顔面に受けた夫が悲鳴を上げて、身体をくねらせ、降り注ぐ汚物から顔を反らせようとするが、意地悪く剛沢は抱え上げた女医の身体を軽々と運んで、夫の顔の真上にビシャビシャと液状化した便塊を放出し続ける排泄口を持って行くのであった。自分に罪を擦り付けた男に罰を与えているんだと、心の中で快哉を叫びながらも、剛沢の人間性の無い残忍な行為に恐怖を感じる和久井であった。

バスタブの中は、女が排出した茶褐色の汚辱の液が水溜まりの様になり、夫の顔にはドロドロとした粘着物が付着していた。

「おお臭せえ！臭せえや！日頃どんな贅沢な物を口にしていたら、こんな臭い糞が出せるんだ！」

女を抱え上げたまま剛沢が鼻を蹙めた。

我慢しきれず、愛する夫の上に排便してしまった申し訳なさに、剛沢に抱えられたまま女が泣きじゃくった。

汚濁の水溜まりの中で、糞塗れになった雁字搦めに縛り上げられた男の体がピクピクと震えていた。

余りの衝撃にハアハアと荒い息をする男の様子を眺めていた剛沢が、ふと男の股間に目を映した時、パジャマのズボンの下から盛り上がっているのに気付いて笑い出した。

「コイツ！自分の女房の糞を浴びて勃起してやがるぜ！女房は淫乱、夫はマゾで揃いも揃って変態夫婦だぜ！」

剛沢の卑劣な揶揄を浴びせられて、女は激しく泣きじゃくった。

「どうした？もう十分に放り出したか？」

剛沢の言葉が終わらない内に、ブリッと肛口から音を立てると、水分をタップリと含んだ

柔らかな便塊が放出され、濁液に黄色く染まった夫の額の上にポトリと落下した。

悪臭を放つ液に塗れた男の目が大きく開き、頭上の愛妻の妖しく蠢く肛口を見詰めた。

ポタリと落ちた柔らかな便塊を皮切りとする様に、引き続いて開きっぱなしになった肛門から次々と新たな排泄物がまるでチューブから絞り出されるマヨネーズの様に押し出され始めた。

「この女医先生はよ！愛する亭主にもっとプレゼントしたいって言っているぜ！」

と、女を抱え上げたまま、剛沢が大声で笑い上げた。

再び始まった放出は、腹の中の汚物を出し切るまで止める事は出来ず、一続きになった柔らかな便が蝨局を巻きながら夫の顔の上に積み上げられて行った。

「しかし、この身体の何処にそんなに糞を溜め込んでいたんだ？溜め込みすぎは身体に良くないぜ・・・」

剛沢に抱えられたまま狂った様に泣きじゃくり排便を続ける女とその直ぐ下で、妻の排泄した大量の便の山に埋まりながらピクリとも動かず死んだように横たわる男が居た。

「よし！これ位腹の中を洗えば充分だろう・・・」

最初の排便を強制されてから、イルリガートルを使って微温湯を何度も流し込まれ、腸内から溢れ出す液も無色透明となっていた。

女は、見知らぬ男の面前で落花無惨な排泄図を晒すだけで無く、夫にも汚物を浴びせてしまった激しいショックで忘我状態に陥っており、大人しく剛沢から洗腸を受け続けていたのであった。

剛沢が右手の中指にワセリンを塗りたくると突然アヌスの中に突き入れた。

浣腸器の嘴管やイルリガートルの太いホースを何度も受け入れて充分柔らかく解ほぐされていた後口の筋肉は、何の抵抗も無く剛沢の指をズブズブと呑み込んで行った。

「随分と良い締め付けじゃないか？これは旨そうなアナルホールだぜ！」

剛沢が中指を直腸内に沈めながら、その暖かい極上の内部と強い締め付け力を指に感じて、感極まった様な声を上げた。

女の菊の花の様な形をした蕾は、剛沢の指をギッチリと隙間無く啜え込んでいた。

剛沢が埋め込んだ指をグリグリと動かすと、女の口から声が漏れた。

女の反応に満足した様に、「お前こちらの方も活ける口の様だな？」と、指先を淫靡に蠢かせ、暖かく湿った内部を搔き上げながら言った。

「お前、何時も此所を使って旦那と乳繰り合っていたんじゃないか？」
剛沢の指先のテクニックにより再び性感を呼び覚まされつつある女が、
「そんな事無いわ！」と、必死に首を振った。
「それじゃ、これから此所の良さを教えて上げるぜ！」
と、言い捨てると女の秘孔を責めていた指を引き抜いた。
「和久井先生よ！女医さんの方の準備は出来ているようだぜ！」
哑然とした表情で、こちらを見ている和久井の方を振り向くと得意気に声を掛けた。
女を床の上に犬の様に四つん這いの姿勢を取らせると、後ろを向いたセピア色の蕾に潤滑
様のクリームを塗り込めた。
その周囲に伸びた放射状の皺に沿って丹念に塗り込むだけではなく、肛口を割って指先を
その内部に差し入れ、ツルツルするクリームを塗り込めて行った。
ツルリと指が肛門を出入りする度に秘められた性感を刺激するのか、女は切ない吐息を吐
き、尻をくねらせて悶えた。
度重なる暴虐に、最早、女には抵抗する意志も喪失したのか、四つん這いの姿勢を崩さず、
剛沢にされるままとなっていた。
「和久井先生よ！女医さんの準備は全てOKだぜ！憧れていた女の初物を頂いたらどうだ
い・・・もっとも先生もこちらの方は、筆下ろしかも知れないがな？」
面白そうに笑いながら、剛沢が和久井のモノを手にとって女の後口に押し当てた。
セピア色をした挿り鉢状の柔らかな窪みに和久井の硬化した肉棒の先端の半球状の部分が
振れた時、女の口からアッと言う呻き声が上がり、身体がピクッと震えた。
「さあ！ソコだ！其処にグッと腰に力を入れて押して出るんだ！」
剛沢の言葉に励まされたように、和久井が先端をその中心部に押し当てたまま腰を突き出
した。
抗し難い圧力の前に苦しげに眉根を寄せて、アッ・・・アッ！と小さく呻き声を上げながら、
両手の指で激しく床を搔き筆った。
凶暴な男の行為の前にピッタリと閉ざされていたその淫靡な蕾は徐々に開いて熱く熱を帯
びたモノを呑み込んで行った。
痛いように亀頭部分を締め付ける、リング状の筋肉の緊縮力に和久井が思わずアアッと声
を漏らした。
「さあ、そのままだ！そのままグッと中に突き入れるんだ！」

剛沢が二人の結合具合を見ながら声を掛けた。

呪文の様な剛沢の声に、熱に浮かされた様に和久井は腰に力を込めて更に押し入れた。

額にビッシヨリ汗を浮かべて眉間を蹙めて耐えていた女の口からヒィ！と小さく悲鳴の様な声が上がった。

亀頭部の最も太くなった鰓の部分ズルッと狭い入り口を通過し、そのままの勢いで根元まで女の体内に押し入れた。

和久井も女もウツと声を上げてまるで電気に撃たれたように腰を振るわせた。

「お見事、お見事、ズッポリ根元まで入ったじゃないか！」

二人の結合の完了を見届けて剛沢が手を叩いた。

深々と女肉の中に肉棒を貫き通して、和久井も女医も動きを止めてハアハアと荒い息を吐いていた。

「旨めー！こんな旨い酒を飲んだのは、生まれて初めてだぜ！」

剛沢が勝手にサイドボードから持ち出した高級ブランデーを飲みながら歓声を上げた。

旨そうに高価な酒を啜る剛沢の目の前では、和久井と女医が肛門性交で一つに繋がっていた。

和久井の陰茎は剛沢のモノの様に巨大では無かったので、手慣れた剛沢の指遣いにより十分に準備された肛口に激痛を与える事は無く、女にしてみれば通常排泄の用にしか使われない器官を内側から押し広げられる気味の悪さしか最初は感じなかったが、何時の間にかその気味の悪さは背徳的な官能の息吹となって女医の脳内をジワジワと侵し始めていた。腸管の薄い肉壁を通して厚く熱した怒張から発する激しい鼓動が伝わって来て、そのドクドクする響きが自らの心臓に鼓動に同期していった。

和久井にしても恋い焦がれた女の自分に罪を押し付けた夫でも知らないであろう秘密も箇所へ侵入して、その燃える様な内部や根元を締め付ける快美感に復讐を成就した征服感に浸っていた。

今やもう一つの女性器と化した肉洞を犯す快感に浸る男と常識や羞恥を越えた先に広がる目眩く幻想の世界に遊ぶ女の姿が在った。

互いに一組の性獣と化したように二人は、全身汗塗れとなり、音を立てて腰を打ち付け合っていた。

和久井の押し出す腰の動きに応える様に女医も腰を振り立てた。

何度も立て続けに射精した後なので、腰も軽くなったのか、和久井も長時間に渡って元恋人と繋がっていた。

「ああーっ！いいわ！和彦さん！もっと激しく突いて！」

虫のいい話ではあるが、和久井としては自分の事を正体不明の侵入者と最後まで思って貰いたかったが、既に自分の正体が知られていたんだと、自分の名前を突然女から呼ばれて愕然とした。

「違う！私は、和彦では無い！」

和久井が狼狽えて叫んだ。

しかし、それは逆に女に自分の正体をハッキリと教えるのと同じであった。

「良いの、誰でも・・・もっと激しく突いて！もっと美代子を狂わせて！もっともっと恥ずかしい事を仕掛けて何もかも忘れさせて！」

女が悲鳴の様な声で泣き叫びながら和久井の身体を求めた。

和久井が泣きながら、元恋人の身体の中に己のモノを突き続けていた。

それは、清純な女神の様に崇めていた女がこんなにも淫らな女であった事を知った悔しさなのか、落魄れた我が身を元恋人に知られてしまった無念さなのか、こんな形でしか元恋人に会えなかった無念さなのか判らなかつた。

「ああー！ご免なさい！貴男を裏切る積もりは無かつたの・・・あの男に酒を飲まされて・・・その中に変な薬を入れられて、気が付いたら無理矢理犯されていて・・・」

「見え透いた嘘を言うな！お前は安楽な生活がしくて、そのゲス男に尻尾を振ったんだろう！俺が出世すると思って近づいたが、当てが外れて大金持ちの彼奴あいつに鞍替えしたんだろう？」

「ああっ・・・違うわ、今でもあなたの事を一番愛しているわ・・・」

「黙れ！お前は尻軽な淫乱女だ！」

込み上げる肉感にハアハアと息を荒げながら言い訳の言葉を口にするかつての恋人に込み上がる怒りに大きな声を上げた。

今や全てを喪失した怒りが、燃えたぎる復讐心となって女の尻穴を犯し狂った。

女も和久井の怒りをその一箇所ですべて受け止めるかの様に尻を振って応えた。

互いに人間である事を捨て去り肉欲に狂った別の生き物の様に、全身汗塗れとなり息を荒げて激しく繋がっていた。

怒りに燃えた怒張が突き立てる肉孔がもう一つの女陰となって妖艶に蠢き甘美に和久井の

モノを締め付け、何時の間にか妖しげな桃源郷の中に引き込まれていった。

「彼奴らは俺の知っている人身売買のブローカーに売ったぜ・・・」

あの事件から数日して剛沢が和久井に話し掛けた。

「結構良い金になったぜ。あの美人の女医さんは今頃東南アジアの何処かに売られて、連日連夜男を相手にする事になったのさ・・・あの淫乱な女医さんにはぴったりの再就職先だとは思わないか？」

と、和久井の肩を叩きながら笑った。

自分の元恋人の陰惨な運命を想像すると和久井は眉を曇らせた。

そんな和久井の苦悶の表情も無視して、剛沢が話を続けた。

「よ一、和久井先生よ！この金を暫く俺に貸してくれないか？」

勿論和久井に取って、欲しくもない忌まわしい金であったので、「ああ・・・良いよ・・・」と、力無く返事した。

「俺は、この金で組を作ろうと思うんだ！俺は俺達家族を見捨てた世間が憎い！そして、俺達家族を追い込んだヤクザがもっと憎い！この世のヤクザを全て叩き殺してしまいたいと思っている！」

突然剛沢が何かに憑かれた様に虚空を睨み、叫ぶ様に言った。

「しかし、俺一人の力ではたかが知れている・・・幸い俺に賛同して力を貸そうという男達が何人か居る。俺は、そいつ等を集めて組を作ろうと思うんだ・・・ヤクザを殺すためのヤクザの組織さ！」

剛沢が目に妖しげな光を込めて叫び続けた。

「大亜門戸会と云う名前にしようと思う。ダイヤモンドは、気高く、美しく、硬く、傷付かない！」

「ああ・・・それは良い名前だね・・・」

剛沢が拳を握り締め、熱っぽく語るのを、興味なさそうな声で応えるのであった。

終り